

日立製作所の通信機・コンピュータとシステム事業を開拓・推進した

一人の技術者・事業家の生涯の記録

# 私本・久保俊彦の日記

自著『随想折々』の序文・目次と略歴・経歴を付録

編集 久保裕

日立製作所の通信機・コンピュータとシステム事業を開拓・推進した

一人の技術者・事業家の生涯の記録

# 私本・久保俊彦の日記

自著『随想折々』の序文・目次と略歴・経歴を付録

編集 久保 裕





# もくじ

|   |               |    |
|---|---------------|----|
| 一 | 『久保俊彦の日記』図書目録 | 11 |
| 二 | 『久保俊彦の日記』の写真  | 19 |
| 三 | 久保家の家系図       | 25 |
| 四 | 久保家の墓「樹心流情」   | 33 |
| 五 | 日記の抜粋         |    |
| 一 | 日記を書き始める 父国治記 | 46 |
| 二 | 誕生の日から        | 49 |
| 三 | 小学校に入学の日      | 55 |
| 四 | 第一高等学校に入学後の記  | 57 |
|   | まえがき          | 5  |

|    |                                                              |     |
|----|--------------------------------------------------------------|-----|
| 五  | 妻久子の昇天……………                                                  | 62  |
| 六  | 第二次世界大戦の終戦の時……………                                            | 64  |
| 七  | 妻諫子の昇天……………                                                  | 67  |
| 八  | 妻よね子を迎えて……………                                                | 69  |
| 九  | 黒字に転換…事業は単に利益を得ることが目的ではない……………                               | 71  |
| 十  | 米国RCA社との技術提携のため米国出張の記……………                                   | 75  |
| 十一 | …日本のエレクトロニクス技術を世界のレベルまで進歩させる<br>次男 明の自死…今後は社会に貢献するために働く…………… | 95  |
| 十二 | 茂原から戸塚へ転勤……………                                               | 98  |
| 十三 | コンピュータ部をつくる……………                                             | 100 |
| 十四 | コンピュータ工場の構想……………                                             | 102 |
| 十五 | 制御用コンピュータ設計課を設立……………                                         | 104 |

|    |                                    |     |
|----|------------------------------------|-----|
| 十六 | 藍綬褒章を受章                            | 106 |
| 十七 | 食道癌を発症して                           | 111 |
| 十八 | 癌の九回目の手術                           | 114 |
| 十九 | 最晩年の年始に                            | 117 |
| 二十 | 最後の日記                              | 119 |
| 六  | 橋本一二氏の弔辞                           | 122 |
| 七  | ：日立製作所の情報通信事業分野の開拓者<br>『随想折々』からの抜粋 |     |
|    | 序 文・目 次                            | 130 |
|    | 略 歴                                | 134 |
|    | 公職・団体経歴一覧表                         | 136 |
|    | 関係会社経歴一覧表                          | 139 |
|    | あとがき                               | 140 |

## もくじ



## まえがき

父・久保俊彦が他界して、平成十三年二月に七回忌を迎えた。この年に遺品の整理もおおかた済んで、穏やかな新年を迎えている。父の晩年、私は元旦になると両親が妹夫妻と住む横浜の富士山がよく見える丘の上にある家に出かけて、母のつくるおせち料理をいただいた。いまではなつかしい思い出である。

今、手元には父の遺した日記がある。生誕の日から学生時代の明治、大正から昭和初期の記録と、戦後、戦災から復興の足がかりができた昭和二十五年から、永眠する二週間前までの四十五年間の日記である。生まれたその日から、死の直前まで欠かさず毎日書いた日記の一部だ。誕生の日から満七才までは、両親（父国治、母幽香）が書き、あるいは両親の指導により本人が書いたものだ。満七才の小学校二年の時、父 国治が「これよりは自ら考え自ら書く」としるし、その後、全て自筆となっている。

父は、昭和七年に東京大学理学部物理学科を卒業し、同年、茨城県日立市の日立製作所に入社した。石炭を掘り出していた常磐炭鉱や、銅鉱のある日立鉱山に

近い所で、モーターなど電動機器の制御装置の研究と開発に従事する。電気制御の分野は当時のハイテク産業であった。電気の交流を直流に変換する電子管「水銀整流器の逆弧に関する研究」で工学博士号を取得している。先の世界大戦後まもなく、米国の先進電子技術の導入のため、昭和二十七年いち早く渡米して、米国RCA社からのラジオやテレビをつくる電子部品の製造技術を日立製作所にもたらしている。その時すでに米国では半導体技術の研究開発が進んでおり、コンピュータの実用化を目の当たりにして、将来の我が国の電機事業の進むべき方向、エレクトロニクス分野の発展を予見していた。

米国から帰国後、千葉県 の茂原に真空管やテレビのディスプレイ装置を製造する工場を創建する。昭和三十四年に神奈川県 の戸塚工場に転勤し、通信機器やコンピュータの事業化に邁進する。

昭和三十六年に東京の本社に出て、昭和四十五年、副社長に就任した。重電機器や家電品の製作を主にしていた日立が、今年年間売上高九兆円規模の大企業に成長し、その五十%を占めるエレクトロニクス分野を育て上げたと言っても過言ではない。日立のエレクトロニクス分野の発展は、父の歩んだ道そのものよう

に見える。

趣味の世界では学生時代から謡曲を始め、長唄そして五十代からは小唄の稽古を始める。小唄は松風流の名取りとなる。昭和六十年、十二代目市川団十郎の襲

名披露の歌舞伎座で「助六由縁江戸桜」を河東節浄瑠璃の十寸見東俊の名で素人

すけろくえんぎのえ どざくら かとうぶし

衆の一人として出演した。

一方、スポーツではゴルフを好み、常に人並み以上のスコアを出していた。終戦後からの四十七年間で二、二一四回、年平均四十七回であり、おおむね毎週一回は欠かさずゴルフをしたということになる。その記録が全て残されている。六十八歳の時に相模野カントリークラブで七十八のスコアを出している。

酒食ともにいたって盛んで頑健だった父も、七十六歳のとき、食道に癌が検出された。東海大学病院で手術、食道と胃の一部を切除する大手術だった。その後、毎年のように癌性腫瘍の発見、摘出を繰り返した。舌部の癌を最後まで除去出来なかったのが致命傷となった。声を出せない、喉を通して食事が出来なくなるような手術はしないといって、本人は平然としていたが、放射線治療など筆舌に尽

くせない闘病であった。九回目の手術で、右顎下のリンパ腺の腫瘍を切除する。手術後の低下した喉と舌の機能は、その後の医師団による熱心なりハビリテーションにも関わらず、取り戻すことは出来なかった。

亡くなる平成七年の元日を独り病院の一室で迎え、日記には「心安らかに、家の中、周囲の多くの人に感謝している。形の上では不自由で、何も出来ない生活だが、それでも気楽に受け入れて過ぎて行くように勤めている」と、死期の近いことを覚悟しながら穏やかな姿勢で書いた。そして、その年の二月二十日、八十五年の生涯を閉じた。

亡くなる前年、八十四歳のとき、三越劇場で小唄『今日もまた』を唄ったのが最後の舞台であった。

他界する数ヶ月前に、何かしてほしいことがあるかと、父に問いかけると、自分の唄った小唄をCDにしたいという。カセットテープに録音してあった小唄の数百曲から自ら選曲した四季折々の唄二十五曲を、私はCDに収めた。永眠する直前に出来たCDを聞いて「自分の声がデジタル化出来た」と、たいそう喜んでいた。出来たCDの知人への送り状に「ご縁があつてお手許に参ったのですから、

頭を撫でて、声を聴いてやってください。一つ小唄を始めてみようかとなれば、最もよろしいのですが」と書いた。

私たちの世代になると、昨今では回りを見渡しても小唄を趣味でやる人など見かけなくなっている。私自身は、ときどき小唄の稽古をしてみようかと思ったりもするけれども、なかなか始められないでいる。

父・久保俊彦の事業家としての記録は、日立製作所の社報や社史あるいは茂原工場史、戸塚工場史などの関連した事業所や関連会社の事業記録に見ることができる。また研究・開発者としての記録は、「日立評論」誌や「返仁会」など発行雑誌に論文や記事を執筆している。また晩年八十三歳のときに社外に発表したものから記念に残しておきたいと、特に企業文化や趣味のことについて三十編ほどの資料をまとめて『随想折々』と題した小冊子を発行している。

「久保俊彦の日記」は生涯欠かさずに書いた個人の記録ではあるが、学業と社業そして娯楽や趣味また多くの人との交際の記録は家族のことはもちろん、毎日出会った人びとの付き合いの記録であり、その時代の生きた記録として残しておきたい。

前記したが、父は生前に社外に発表したものを『随想折々』と題して一冊の本にまとめて平成五年四月に発行している。ここに、そこに書かれた序文、目次と略歴・公職団体・関連会社経歴一覧表を掲載しておく。

久保 裕

一．平成十七年十一月八日 記

二．平成二十八年二月戸塚事業所通信史料館に寄贈するに当たり追記

一・『久保俊彦の日記』 図書目録

|   |              |                 |
|---|--------------|-----------------|
| 一 | 明治四二年（一九〇九年） | 十二月八日鳥取県倉吉市にて誕生 |
| 二 | 明治四三年（一九一〇年） |                 |
| 三 | 明治四四年（一九一一年） |                 |
| 四 | 明治四五年（一九一二年） |                 |
| 五 | 大正二年（一九一三年）  |                 |
| 六 | 大正三年（一九一四年）  |                 |
| 七 | 大正四年（一九一五年）  |                 |
|   | 大正五年（一九一六年）  | 鳥取県倉吉市成徳小学校に入学  |
|   | 大正六年（一九一七年）  |                 |
|   | 大正七年（一九一八年）  |                 |
|   | 大正八年（一九一九年）  |                 |
|   | 大正九年（一九二十年）  | ・ ・ ・           |
|   | 大正十年（一九二一年）  | 〈欠〉             |

|    |              |                           |
|----|--------------|---------------------------|
| 八  | 大正十一年（一九二三年） | 鳥取市鳥取中学（後の鳥取西高）に入学        |
| 九  | 大正十二年（一九二三年） |                           |
| 十  | 大正十三年（一九二四年） |                           |
| 十一 | 大正十四年（一九二五年） |                           |
| 十二 | 同右年の英文日記     |                           |
| 十三 | 大正十五年（一九二六年） | 長野県飯田中学（現在の飯田高校）へ転校後、     |
| 十四 | 昭和二年（一九二七年）  | 旧制一高（現在の東京大学の一部理科に入学・・へ欠～ |
| 十五 | 昭和三年（一九二八年）  | （1）、（2）、（嘯雲寮）             |
| 十六 | 昭和四年（一九二九年）  |                           |
| 十七 | 昭和五年（一九三十年）  |                           |
| 十八 | 昭和六年（一九三一年）  |                           |
| 一九 | 昭和七年（一九三二年）  | 東京帝国大学理学部物理学科卒業           |
| 二十 | 昭和八年（一九三三年）  | 日立製作所に入社 日立工場研究係員         |



|    |               |                   |
|----|---------------|-------------------|
| 二一 | 昭和九年（一九三四年）   | 英文日記              |
| 二二 | 昭和十年（一九三五年）   |                   |
| 二三 | 昭和十一年（一九三六年）  | ・ ・ ・ 〈欠〉         |
| 二四 | 昭和十二年（一九三七年）  | ・ ・ ・ 〈欠〉         |
| 二五 | 昭和十三年（一九三八年）  | ・ ・ ・ 〈欠〉         |
| 二六 | 昭和十四年（一九三九年）  |                   |
| 二七 | 昭和十五年（一九四十年）  | 日立研究所課長待遇         |
| 二八 | 昭和十六年（一九四一年）  |                   |
| 二九 | 昭和十七年（一九四二年）  |                   |
| 三十 | 昭和十八年（一九四三年）  | 茂原工場建設事務所員兼務      |
| 三一 | 昭和十九年（一九四四年）  |                   |
| 三二 | 昭和二十年（一九四五年）  | 茂原工場技術課長          |
|    | 同右年           | 工学博士の学位を東京大学より受ける |
| 三三 | 昭和二十一年（一九四六年） |                   |
| 三四 | 昭和二十二年（一九四七年） |                   |

|    |              |              |              |              |              |              |              |              |              |              |              |
|----|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|
| 三八 | 昭和二六年（一九五一年） | 昭和二七年（一九五二年） | 昭和二八年（一九五三年） | 昭和二九年（一九五四年） | 昭和三十年（一九五五年） | 昭和三一年（一九五六年） | 昭和三二年（一九五七年） | 昭和三三年（一九五八年） | 昭和三四年（一九五九年） | 昭和三五年（一九六十年） | 昭和三六年（一九六一年） |
| 三九 |              |              |              |              |              |              |              |              |              |              |              |
| 四一 |              |              |              |              |              |              |              |              |              |              |              |
| 四二 |              |              |              |              |              |              |              |              |              |              |              |
| 四三 |              |              |              |              |              |              |              |              |              |              |              |
| 四四 |              |              |              |              |              |              |              |              |              |              |              |
| 四五 |              |              |              |              |              |              |              |              |              |              |              |
| 四六 |              |              |              |              |              |              |              |              |              |              |              |
| 四七 |              |              |              |              |              |              |              |              |              |              |              |
| 四八 |              |              |              |              |              |              |              |              |              |              |              |

茂原工場副工場長

六月～一〇月、米国RCAに出張・技術提携

茂原工場長

戸塚工場長

戸塚工場にコンピュータ部をつくる



1952年に  
ニューヨークで購入

日立製作所取締役、  
通信機事業部長

|    |               |            |
|----|---------------|------------|
| 四九 | 昭和三七年（一九六二年）  |            |
| 五十 | 昭和三八年（一九六三年）  |            |
| 五一 | 昭和三九年（一九六四年）  | 常務取締役      |
| 五二 | 昭和四十年（一九六五年）  |            |
| 五三 | 昭和四十一年（一九六六年） |            |
| 五四 | 昭和四二年（一九六七年）  |            |
| 五五 | 昭和四三年（一九六八年）  | 専務取締役      |
| 五六 | 昭和四四年（一九六九年）  |            |
| 五七 | 昭和四五年（一九七〇年）  | 取締役副社長     |
| 五八 | 昭和四六年（一九七一年）  |            |
| 五九 | 昭和四七年（一九七二年）  |            |
| 六十 | 昭和四八年（一九七三年）  | 藍綬褒章を授与される |
| 六一 | 昭和四九年（一九七四年）  |            |
| 六二 | 昭和五十年（一九七五年）  |            |



1960年に日立が発売した  
カラーテレビ（52万円）

第1章 『久保俊彦の日記』 図書目録

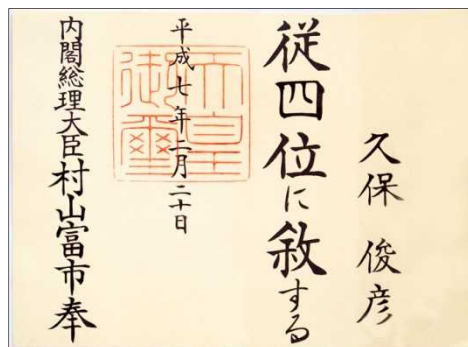
|    |               |                |
|----|---------------|----------------|
| 六三 | 昭和五十一年（一九七六年） |                |
| 六四 | 昭和五十二年（一九七七年） |                |
| 六五 | 昭和五十三年（一九七八年） |                |
| 六六 | 昭和五十四年（一九七九年） | 日立製作所の顧問に就任    |
| 六七 | 昭和五十五年（一九八十年） | 勲三等旭日中綬章を授与される |
| 六八 | 昭和五十六年（一九八一年） |                |
| 六九 | 昭和五十七年（一九八二年） |                |
| 七十 | 昭和五十八年（一九八三年） |                |
| 七一 | 昭和五十九年（一九八四年） |                |
| 七二 | 昭和六十年（一九八五年）  |                |
| 七二 | 昭和六十一年（一九八六年） |                |
| 七三 | 昭和六十二年（一九八七年） |                |
| 七四 | 昭和六十三年（一九八八年） |                |
| 七五 | 平成元年（一九八九年）   | 特別顧問に就任        |
| 七六 | 平成二年（一九九十年）   |                |



1995 年制作した CD  
小唄 25 曲を収録

七 七 七 七 八  
七 八 九 十 一  
平 平 平 平 平  
成 成 成 成 成  
三 四 五 六 七  
年 年 年 年 年  
(一 一 一 一 一  
九 九 九 九 九  
九 二 三 四 五)  
『随想折々』を發行  
二月二十日、日立製作所戸塚病院で永眠

八二 平成七年（一九九五年）三月十七日、閣議決定により「従四位」を授与される



内閣総理大臣 奉証



郵政省発行 内閣総理大臣官房人事課からの追賜の通知証とその封筒

二・『久保俊彦の日記』の写真

## 第2章 『久保俊彦の日記』の写真



## 第2章 『久保俊彦の日記』の写真



明治42年から大正4年まで両親が書く  
大正5年（小学校入学）からは自ら書く



明治42年から大正10年までの日記を帙に収納

## 第2章 『久保俊彦の日記』の写真



大正 11 年から昭和 22 年までの日記



大正 11 年から昭和 22 年までの日記  
桐箱（アクリル板の蓋つき）に納める

## 第2章 『久保俊彦の日記』の写真



昭和 26 年から昭和 39 年までの日記



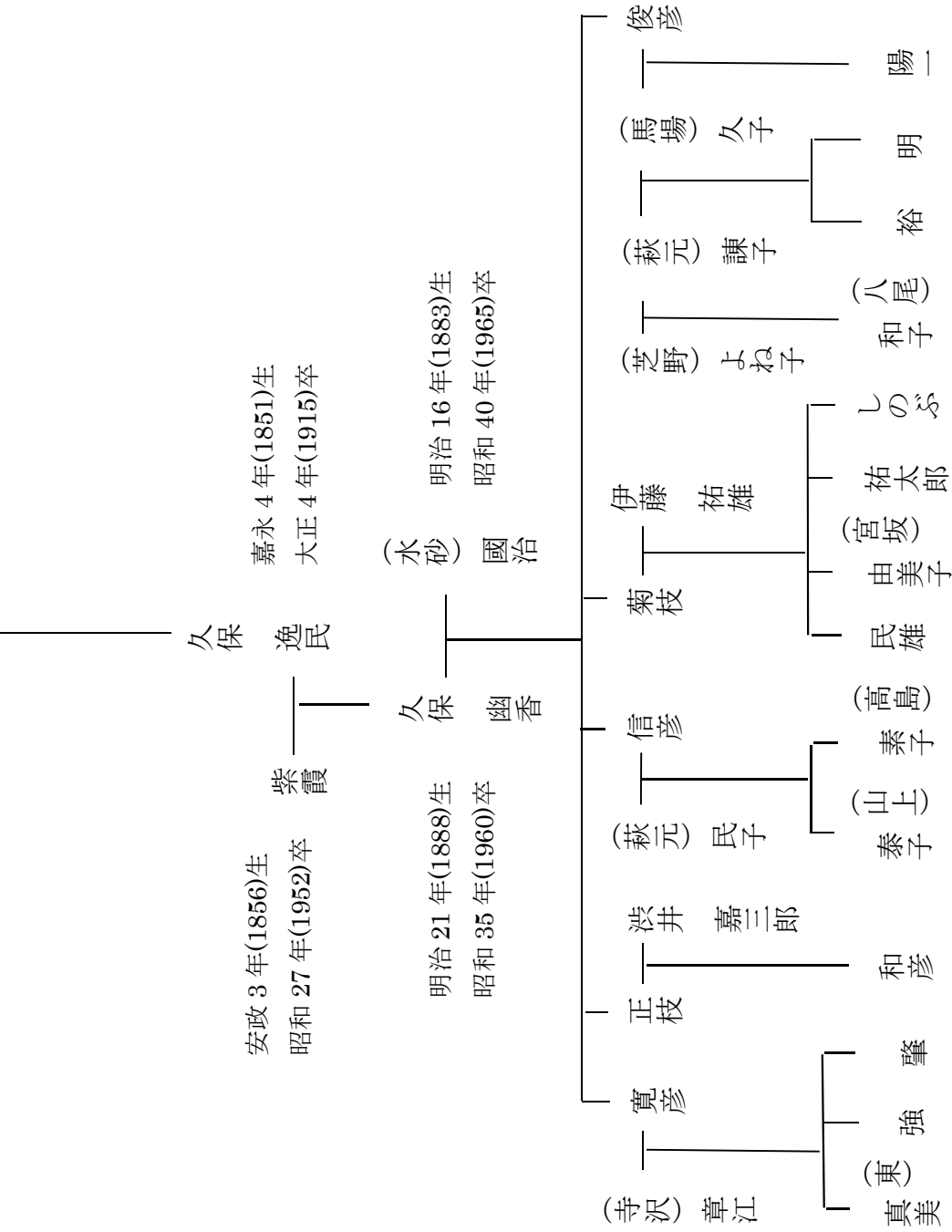
昭和 40 年から昭和昭和 59 年までの日記

## 第2章 『久保俊彦の日記』の写真

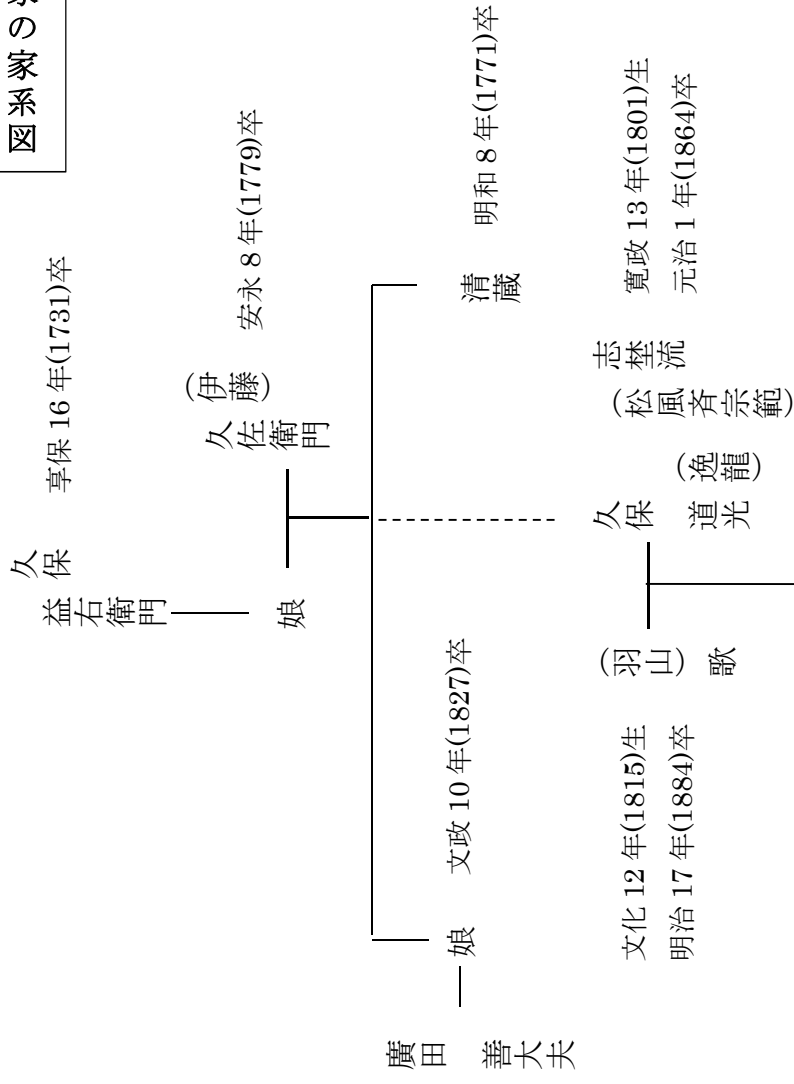


昭和 60 年から平成 7 年（没年）までの日記

### 三・久保家の家系



久保家の家系図



家系図 生年月日と没年月日一覧表 その1

平成 29 年 2 月 20 日現在の記録

|            | 久保         |            | 渋井        |             | 久保        |            | 伊藤         |             |             |            | 久保         | 氏名   |
|------------|------------|------------|-----------|-------------|-----------|------------|------------|-------------|-------------|------------|------------|------|
| 章江         | 寛彦         | 正枝         | 嘉三郎       | 民子          | 信彦        | 菊枝         | 祐雄         | よね子         | 諫子          | 久子         | 俊彦         |      |
| 昭和13年3月26日 | 昭和7年8月21日  | 大正15年7月23日 | 大正8年2月15日 | 大正12年5月1日   | 大正7年4月1日  | 大正3年7月2日   | 明治41年7月21日 | 明治43年10月7日  | 大正4年2月24日   | 大正2年4月     | 明治42年12年8日 | 生年月日 |
|            | 平成17年2月23日 | 平成18年4月4日  | 平成8年12月5日 | 平成24年12月27日 | 平成2年1月28日 | 平成25年3月21日 | 平成15年5月16日 | 平成10年12月14日 | 昭和21年10月16日 | 昭和10年6月20日 | 平成7年2月20日  | 没年月日 |
|            | 満72歳       | 満79歳       | 満77歳      | 満89歳        | 満71歳      | 満98歳       | 満94歳       | 満88歳        | 満31歳        | 満22歳       | 満85歳       | 没年齢  |



家系図 生年月日と没年月日一覧表 その2

平成 29 年 2 月 20 日現在の記録

|                         |                        |                        |                         |                        |                         |                         |                        |                         |                        |                        |                        |                         |                       |      |
|-------------------------|------------------------|------------------------|-------------------------|------------------------|-------------------------|-------------------------|------------------------|-------------------------|------------------------|------------------------|------------------------|-------------------------|-----------------------|------|
| 眞未                      | 強                      | 久保<br>肇                | 渋谷<br>和彦                | 山上<br>泰子               | 高島<br>素子                | 伊藤<br>民雄                | 宮坂<br>由美子              |                         | 伊藤<br>しのぶ              |                        | 裕                      | 明                       | 久保<br>陽一              | 氏名   |
| 昭和<br>47年<br>11月<br>24日 | 昭和<br>42年<br>3月<br>16日 | 昭和<br>38年<br>11月<br>5日 | 昭和<br>34年<br>10月<br>13日 | 昭和<br>24年<br>12月<br>1日 | 昭和<br>22年<br>10月<br>20日 | 昭和<br>21年<br>12月<br>24日 | 昭和<br>18年<br>4月<br>26日 | 昭和<br>15年<br>7月<br>31日  | 昭和<br>12年<br>4月<br>22日 | 昭和<br>17年<br>4月<br>28日 | 昭和<br>16年<br>11月<br>7日 | 昭和<br>14年<br>2月<br>4日   | 昭和<br>9年<br>3月<br>26日 | 生年月日 |
|                         |                        |                        |                         |                        |                         |                         | 平成<br>29年<br>1月<br>23日 | 平成<br>24年<br>10月<br>19日 |                        |                        |                        | 昭和<br>33年<br>11月<br>29日 |                       | 没年月日 |
|                         |                        |                        |                         |                        |                         |                         | 満<br>73歳               | 満<br>72歳                |                        |                        |                        | 満<br>19歳                |                       | 没年齢  |



久保俊彦の祖父久保逸民  
嘉永4（1851）年～大正4（1915）年



大正6年6月24日 鳥取県倉吉市にて  
祖母久保紫霞 両親久保国治・幽香と妹菊枝と  
久保俊彦 満8歳（前列右）

### 第 3 章 久保家の家系

## 四・久保家の墓「樹心流情」

久保 裕 記

平成二十一年二月二十日父俊彦の命日に

「樹心流情」の四文字は、東京の高尾にある東京霊園の久保家の墓石に大きな文字で刻まれている。久保家の先祖の墓は、鳥取県倉吉市の勝入寺にあったが、大正か昭和の初に出水による山崩れのために埋没してしまった。祖父久保国治が残したアルバムには、大正十一年に撮影した「樹心流情」と碑文に書かれている墓の写真があった。

父の三人の兄弟、俊彦、信彦、寛彦は東京霊園にその四文字を墓石に刻み昭和五十年十二月に新墓を建立した。

「樹心流情」の由緒はわからなかった。父俊彦は、漢文として「心を流情にたてる」と読み、「流情」については、自然の姿、行雲流水の仏心・信仰のようなもの、また人間や動物の情けあるものの姿だろうと想像できる、と書き残して平成七年に他界している。

平成十七年三月、叔父寛彦が亡くなった。その叔父の四十九日法要の後、自宅にお寄りして遺品を見せていただいた。文箱の中から偶然に、「樹心流情」の語源を調べたメモが見つかった。万年筆で書かれたわずか四行のメモだった。

漢文で「愚禿仰惟 樹心弘誓仏地 流情難思法海」と書かれていた。

親鸞聖人が『教行信証』の解説本として浄土真宗の肝要を表したといわれている『浄土文類聚鈔』のなかに親鸞の言葉として書かれている。愚禿は親鸞のことだ。浄土真宗の聖典註釈版（四八四頁）に、読み下し文が示されている。

「愚禿、仰いでおもんみれば、心を弘誓の仏地に樹て、情を難思の法海に流す」。「樹」は「立てる」、「心（しん）」は「阿弥陀仏を信ずる心」すなわち信仰を意味するものであり、「流」は「大海に心をそそぐ」で、「情（こころ）」は「感謝すなわち菩提心を意味する」といつていいのだろう。

叔父のメモには、さらに中国の『西遊記』の物語で知られている玄奘三蔵法師の『大唐西域記』に記されている言葉が漢文で「樹心仏地 流情法海」とあった。平凡社の東洋文庫『大唐西域記』水谷真成訳注によると次の通りだ。巻第三の六章「カシミール国」のくだりに出てくる。トカラ国（現在のアフガニスタンの北部）のヒーマラタ王が、カシミール地方（現在のインド西北部でパキスタンとの国境地帯で今なお紛争が絶えない）の蛮族を征伐するときの言葉として「心を菩提にかけ、仏法を聞くことを心がけた」という記事である。

親鸞の『浄土文類聚鈔』は、浄土教がインドから中国を経由して伝えられ、歴史的な浄土真宗の成り立ちを述べており、親鸞は、当然インドから伝えられた仏教原典を持ち帰った玄奘三蔵法師の著した『大唐西域記』も読んでいたのである。

「樹心流情」は、宗教的にたいへん重い言葉だった。

墓石に刻み残した「樹心流情」とは、「信仰の心を立てて、感謝の気持ちを大事にしなさい」と理解できる。生きること、それは仏を信じ、信仰の心を打ち立てること。そして、仏と人生でめぐり合うすべての人に感謝の気持ちをもつように、そう言っているように思う。信仰というのは、宗教の道に入ることだろうけれども、そういうことまで踏みこむことのできない者は、自分を信じ、仕事に、あるいはスポーツや芸能そして趣味にでも、なにか自分に合ったことに打ち込む、献身することが大事だ、そんな意味と理解してもいいように思う。

このような墓石を残してくれたご先祖そして父と叔父三兄弟に心から感謝している。



父の戒名は「樹心院釋俊樂居士」である。

曾祖父は久保逸民といい、江戸末期は鳥取藩の漢学の師範であり、茶道でも志埜松隠軒宗信を元祖とする「志埜流」十四代目の家元であった。栄誉・栄達などの世俗から離れ優雅に過ごす生き方をした人で、六十五歳で亡くなっている。戒名は「笑翁院釋離塵居士」であることから推察できる。生活は貧しいようであった。そのため祖父の国治は、独学で農業技術を学び、明治の富国強兵政策の時代に生き、農業学校の教師となった。

大正十三年、長野県飯田市の下伊那農業高等学校に移る。鳥取で国治といっしょに指導していた芝原彦十が長野県飯田の下伊那農業高等学校の初代校長となり農業の指導に当たっていた。

飯田は京都や東京にも近く、駒ヶ岳山系の木曾山脈と南アルプスの間を天竜川が流れる伊那谷盆地は肥沃で農業に適していたし、果物栽培も盛んであった。芝原から熱心に飯田に来るように勧められた国治は、貧困な生活から新しい転地に夢を託したのだろう。芝原と共に農産物や果樹の品種改良、農業の近代化と若い農業技術者の育成に熱心に取り組んだ。

飯田市の中央には「リンゴ並木」と名づけられた街路がある。この地方に適した小粒で甘いリンゴの実を付ける。下伊那農業高等学校には、このリンゴの原木となつて樹齢六十年余で枯死した「久保リンゴ」と命名されたリンゴの木の標本が残されている。祖父国治の晩年は菊と朝顔の栽培に精をつくして生涯を閉じた。

父俊彦は飯田で中学校（現在の飯田高校）を卒業し、東京大学理学部に入学し、祖父の夢を実現する。昭和七年に卒業と同時に日立製作所に就職した。立身出世の街道を歩み出した父ではあったが、すでに軍国国家に突き進む時代であり、私生活の面でも幾多の不幸に立ち向かわなければならなかった。

昭和八年、上司であつた馬場桑夫の長女久子と結婚して長男が誕生した。平穩な家庭をもつて生活の基盤が出来たのだが、その翌年、久子は肺結核のために、結婚してわずか二年目で昇天、クリスチャンであつた。父の昭和十年六月二十日の日記には、

「午前六時神に召される」と記されている。

その後昭和十三年までの三年間の日記は無い。

しかし、その後、会社の上長や、飯田の郷里からの薦めもあって、飯田で弁護士をしていた萩元茂市の次女諫子と再婚をする。次男、三男と生まれる。しかし終戦とともに昭和二十一年、二番目の妻も結核性膀胱炎のために早世する。諫子は昭和十年に飯田ルーテル教会で洗礼を受けていた。諫子が逝った十日後の父の日記には

「久子のときは僕自身が悲しくて暗闇であつた。諫子の場合は可哀そうだったという気持ちで相済まぬ」と、深い痛切な思いを記した。

父は終戦後の食うにも物の乏しい時代に、裏庭に芋畑をつくったりして、半分自給自足の生活をしていた。そんな苦労の多い戦中戦後を生き抜いて戦後日本は人々や企業の血のにじむような努力もあって徐々に復興していった。

昭和二十五年、会社や友人の薦めから、一女を持った芝野よね子を三番目の妻として迎えた。日記にはその喜びを、

「子供達も急に賑やかになった」と記している。

落ち着いた平穏な家庭ができ、翌年には茂原の工場の電球や電子管の生産体制

も整い業績も黒字に転換している。

昭和二十七年に日立は米国 RCA 社から技術導入して今後のエレクトロニクス分野の事業の基盤づくりに着手する。その年の六月六日から一〇月三十一日まで米国に出張する。その後、テレビのブラウン管製造や半導体やコンピュータ開発へと RCA 社との技術提携が進展していく。同年四月二十八日の日記には、

「日本の通信工業、特に Electronics は世界のレベルまで進歩させなければならぬ。日本の中でそれを最もやり易いのは日立だろう。その日立の中でこの仕事に専念するのは自分自身であろう。この目的に自分の全生涯をさし向けようと、記している。

海外との技術提携が順調に進み、会社の業績は急速に発展していった。

ところが、茂原工場から戸塚工場に転勤になる前の年であった、また大きな不幸が突然に襲った。大学に入学したばかりの次男が、思いがけない自死により急逝するのである。このときの傷心と苦しみから、父は一週間家に引きこもり、日記に次のように記している。

「自分に信仰がないために、このようなことになったことを懺悔する。息子が神を信じ、美を愛した心を受け継いで、これから誤りの少ない人生を終わりたい。仕事に精を出し、世の人々に、特に若い青少年に何事かサービスする精神に徹することが、息子の霊を弔うことになるだろう」

この出来事の翌年には、会社にコンピュータ事業部門を設立し、若い技術者を集めて、初の国産大型コンピュータの生産に乗り出す。

それから三十六年後、日本は高度成長を遂げた平成七年に、父は八十五歳でこの世を去る。三番目の母も敬虔なキリスト教徒だった。父が先に他界して残された母の教会での葬式のと、牧師さんが、そういう母の日常の行い、信仰に生きた母の生涯を丁寧につつくりとお話してくださった。

私たち三人の異母兄弟が今日まで長い間いさかきも起こさず、仲良くして来られたのも、父が立派に生涯を全うしたのも、母のおかげだと心から思うのである。

私は、この「樹心流情」の四つの文字に出会い、遠く玄奘三蔵法師の『大唐西域記』を読むことにより、インド、アフガニスタを旅して、インド、中国から伝

来して仏教の普遍的な真理である縁起生起を学び、完成された浄土教の教えも学ぶことができた。そして、父の日記を読むことにより、仏教に限らず信仰を得て信仰に生きることの有難いことをあらためて知ることができ、亡き両親に心から感謝するのである。



東京霊園の久保家の墓「樹心流情」

墓誌

笑翁院釋離塵居士  
久保逸民  
大正四年四月十四日

瑞照院釋尼紫霞大姉  
久保紫霞  
昭和二十七年三月二十日

慈照院釋尼幽香大姉  
久保幽香  
昭和三十五年十二月二十日

春光院釋国華居士  
久保国治  
昭和四十年三月十八日

十  
久保久子  
昭和十年六月二十日

清芳院釋尼妙諫大姉  
久保諫子  
昭和二十一年十月十六日

浄省院釋智明居士  
久保明  
昭和三十三年十一月十九日

高德院釋諦彦居士  
久保信彦  
平成二年一月二十九日

樹心院釋俊樂居士  
久保俊彦  
平成七年二月二十日

十  
久保よね  
平成十年十二月十四日

釋寬仁信士  
久保寬彦  
平成十七年二月二十三日

釋尼優信  
久保民子  
平成二十四年十二月二十七日





## 五・ 日記の 抜粋

# 一・日記を書き始める 父国治記 明治四十二年(一九〇九年)

明治四十二年(一九〇九年)十二月八日 父(久保国治)記

日記をしるすことは、一種の意志鍛練法なること、人の既に唱えるところなり。おのれは更に思う、日記の頁を繰り返すことほど人をして清趣を遊ばしむるものはあらじと。実に父は十五歳の時より日記を認めはじめて、今日に至るまで一日も怠りたることなし、今後といえどもまた然るべし。享樂いかりなるを知らざるなり。

およそ追懷には無限の快感をとまなう。殊に意識の再生を望み得ざる幼児の状に至つては、人は最大の興味を以つて之を知らんことを求む。然るに不幸なる父は幼児の記録を有せず。遺憾堪ゆべからず。

俊彦のためにこの日記をはじめし所以は、其の生長の後、この記によつて何等かの感興を起さしめんがために外ならず、又、児の發育を楽しまんとするは第二の目的なり。

十二月八日 父しるす

第5章 1. 日記を書き始める(1909年)

次の二枚の写真は右記『自叙体の書き方』父国治の自筆文章

日記をしろすとは一種の意を鍛錬<sup>錬</sup>なること人  
の既に唱ふるところなり。おのれは更に思ふ、日  
記の頁を繰返すを好む人をして清趣に遊ばし  
むるものはあらうと。實に父は十五歳の時より  
日記を認めはじめ、今日に至るまで一日も怠り  
たることなし、今後ともまた然るべし。孝悌  
の心ありあるを知りざるあり。  
凡そ追懐には無限の快感をもたふ。殊に意  
義の再生と望み得ざる幼時の状に至つては人  
は最大の興味を以て之を知らんことを求む。然る

第5章 1. 日記を書き始める(1909年)

に不幸なる父は幼年の記録を有せず。遺  
憾堪ゆらうす。  
後多のために此日記をはじめし所以は、其生長  
の後、この記によつて何處かの感興<sup>そく</sup>を觸<sup>ふ</sup>れし之  
かために外ならず、父兄の發育を樂しまん  
とするは第一の目的なり。

十二月八日 父しるす

自叙體の書き方と

## 二・誕生の日から

明治四十二年(一九〇九年)十二月八日(水)快晴

父(国治)記

《誕生の日》 午前十一時四十五分生まれる、すぐにオギヤオギヤとなく。この声をきいた満〇才おぢいさんと父とは隣の室でホツと胸をなでおろした。

第一に産湯を使って、真白いネルの襦袢の上と裏の白い、表は桃色木綿の小さい綿入れを重ねて着る。先ずおぢい様に抱かれる。おぢい様のお髯はなかなか長くて顔にかかる、これは切らねばならぬわいと仰しやる。鹿野のおほばあ様が見えた。こんどはお曾祖母様に抱いていただく。大きな児だと仰しやった。お父様にもしばらく抱かれた。からだはどこも真赤だ、赤ん坊とはよく言ったものである。

大黃と黃連と甘草(二尾ツツ)とを交せて煎じた薬を「ガーゼ」にふくませて吸う。布を口元に持って行くとすぐに口をあけてうまそうに吸う。人は生まれるや否や食物摂取の本能をそなえて居るものだとお父様は感心していらつしやる。小さな盃に二杯ばかり飲んだが間もなく吐いた。腹の中のものも吐いてしまった。

美しい小さな眼をときどき開く。時々泣いた。泣く毎に、それは臍の緒が痛いのだろうと皆んなが仰しやる。

夜はかあ様の傍でねる。乳はまだのまぬ。例の菓をのむ。

坊の生まれた時の家内は、おちい様、おばあ様、おとう様、おかあ様の四つたり、坊をそえて五人となった。家は、研屋町のなか程、格子付の二階屋、上が二間、下が四畳半二ツ、生まれたのは奥の六畳であった。産屋に入っていた人は、おばあ様と産婆とお医者様だけ。

お父様は一体今日は学校のある日だけれど、かあ様や坊やの為に休みになった。おかあ様は無論学校へ出られないから、今朝、とう様が代って届を書いてお出しになった。宇谷の学校に居らっしゃるおちい様へは電報でそういってお帰りをねがったのである。

十二月九日(木)

父(国治)記

《満0才》 昨日は天氣が好いし家内は皆な揃うし、実にいい日に生まれたものだ。

長かった頭がだんだん円くなった。からだはやっぱり真っ赤だ。

今日もまだ乳をのまぬ。例の葉だけのませてもらう。

今日名がきまった。俊彦。おぢい様が考えて下さった。此以外に、一郎、精一、鉄一、守一、晴彦、一彦、など沢山あった。このうちで俊彦が一番いいと、とう様とかあ様が仰しやって、おぢい様が賛成して下さってとうとうこれにきまったのである。

早く笑うようになればいいなあとおとう様は仰しやる。

お祝いが諸方からくる。

十二月十日(金)

父(国治)記

今日から乳を飲む。かあ様の乳房は今日から乳がいつぱい出来だしたのだ。何より嬉しい事だと皆が仰しやる。

晩方おとう様のお帰りを待たないで命名式をすましていただいた。産婆の婆さんに抱かれてお膳の前にすわる。皆様からいただいたお盃に婆やの手で受け取ってくれた。

夜お祝いの方々が四、五人いらつしやる。皆いい子だとほめていった。ほめられるのはお世辞でもかまわない。

十二月十一日(土)

母(幽香)記

今日はお薬を飲まないで乳ばかりであつたから、お腹も痛まず、すかなかつたから余り泣かなかつた。

お湯をつかうことを一日やめにした。昨日は産婆をつかはして貰った時あまりくさめがついたので風邪を引いてしまうから今日一日休もうと、かあ様の発議が



有ったからである。

お父様今日は宿直でお帰りがなかった。

### 十二月十二日(日)

### 母(幽香)記

朝方から臍の緒がちぎれて居るのを皆が知らずにいたから痛くて泣いたが、八時には取っていたく事が出来た。

今日は大いに機嫌がいいと皆に褒めていただいた。

臍の緒が切れたので湯をやめとした。

お父様が坊の顔が見たくてしようがないだろうと母様が仰しやった。お父様は今日も宿直でお帰りなさらなかったからである。

お乳のおかげで少し肥ってきたし眠っている時は笑うことが出来でした。

お祖父様も今日は坊の顔を見て、坊とお話をなさった。朝から晩まで二、三度目を覚ましたがあとは心地よく寝通した。

### 十二月十三日(月)

### 雨夕方から初雪

### 母(幽香)記

今日はお父様が久しぶりにお帰りになる日だ。身体を清潔にしておかねばならぬ。お湯をつかわして戴いたが其の為か夜は鼻がつまって呼吸が苦しかった。十二時頃までお祖母様に抱いて戴く。夜は二度、目をさまして母様の乳をいただいた。

一昨日から左の睾丸が赤く腫れて痛かった。皆が安まして下さったが、今日は全快したようだ。お乳が沢山なので坊一人ではとても飲み尽くせない。母様は始終はって痛いといってひねったり搾ったりしていらっしやった。しかし久しくかかってしぼったより坊が一度飲んだ方が余っ程すくそうだ。坊はそれ程一度でも沢山飲んだのだ。だから昨日よりもまた肥って可愛らしくなった。

十二月十四日(火)

母(幽香)記

今日は七夜だからお祝いを下すった家に赤飯を持って行く日だ。昨日からお米をかったり小豆を洗ったりして有ったが今朝お祖母様の頭がひどく痛み出したので一日延ばす事に決めた。

三・小学校に入学の日 大正五年(一九一六年)

四月一日 《満六才》

キヨウハセイトク

シヨウガツカウエ

ハイタ。

オバアチャンニツレラレテ。

ニウガクシキガアツタ。

《父(国治) 注記》

今日は、はじめての入門故、朝、餅をついて一同祝賀。

羽織袴の壮健な愛らしい姿を見ては実に彼の前途に幸多かれと祈らざるを得ぬ。

父は、今、無職閑居中、胸中種々計画を抱きつつ彼の将来にも多くの希望を囑するものである。向上、努力、これ人生の一切。努力し尽くして宇宙一体の向上の

犠牲となるのである。人生は進化するのが天の命である、私の進化しつくした後  
は、彼がこれを継承して更に一層大なる仕事を成し遂げるのである。

#### 四・第一高等学校に入学後の記 昭和二年(一九二七年)

一月二日 元日の記《満十七歳 高等学校二年》

世は諒闇のうちに年が改まつて昭和二年となつた。こんな静かな正月はこれから数十年の間無いだろうと云うので例年の早起きにも拘らず今日は七時半起床。それでもお茶と雑煮だけはいつもの如く戴いた。

カルタやトランプをしてみたがあまり気がむかぬ。訪ねてくれる友達もなければ訪ねて行く気もない。只何となく心の中に物足らぬ感じがする。こんな時にはいつも賑やかな寮の事を思い出す。中森にもその事を書いてやった。多分同じように感じているだろう。ドイツ語の本を読んでいるうちに「新年お目出度う」という事をドイツ語で何というだろうと考えてみたが知らない。今度学校が始まつたら聞いてみよう。

編者註 「諒闇」は天子がその父母の喪に服する期間【広辞苑】

|             |   |   |   |   |   |       |     |     |     |
|-------------|---|---|---|---|---|-------|-----|-----|-----|
| 四           | 方 | 一 | 月 | 一 | 日 | 乙未 友引 | 天 晴 | 氣 寒 | 暖 信 |
| 昭和二年十一月二十八日 |   |   |   |   |   | 信 證   |     |     |     |

昔は諒情のうちに今年は改まつて昭和二年となつた。  
 こんど静かな正月はこれから数十年の間、無事なうと  
 あらうで、別年の早起きに拘らず、今日は七時半起床。  
 それでもお茶と雑誌のわけはいつも如く戴せん。  
 カルタやトランプをしてみながらあまり気がおかぬ、訪ねてくれる友  
 達もあければ、訪ねて行く気もふいふ。只何となく心の中に  
 物足らぬ感じがする。こんな時にはいつも賑やかな家の事  
 を思い出す、中書にもその事を書きつけた、多分同いや  
 うに感じてゐるだらう。 といふ語の本を讀んでゐるうちに  
 新年お目出度うといふ事をドイツ語で何といふだらうと考へて  
 みたが知らぬ。 今度第一高等学校が始まるんう聞けとみやう、

昭和2(1927)年1月1日の日記

四月二十一日 新学期のはじめに《満十七歳 高等学校二年》

今日から新学期がはじまる。

朝早く起きて図書館が開くとすぐにとび込んで図書閲覧券をもらった。願号が1だ。武藤君2番で国岡氏3番だ。

九時から主任の先生が来られる。主任の石谷教授が不在と見えて黒河教授が来られた。それから代り々に入って来て教科書を云って行かれた。これが終わるともとの理一の教室にカップをささげて入って行って組選の勧誘をやった。今年の連中の体の大きいのは驚く。十六貫、十七貫などが幾らもあるんだから。

猛烈な風の吹く中を教科書を買って来た。もう二十数円つかってしまった。本も中々いる。家から手紙が来た。やはり予定通り旅行に来るとのことである。夜ちよつと図書館に来てみた。

第5章 4. 第一高等学校に入学後の記(1927年)

|             |          |           |     |
|-------------|----------|-----------|-----|
| 四月二十一日      | 木曜 乙酉 佛滅 | 天 氣 曇 来 家 | 歳 家 |
| 穀 雨 回 三月二十日 | 暖 寒 風 信  | 信         |     |

今日から新学期が始まる。  
 朝早く起きて図書館へ行くことに決めた。図書館の  
 番手が1回。武藤君と番手岡田氏の番だ。  
 九時から主任の先生が来られる。主任の石谷教授が不在と見えて  
 黒河教授が来られる。それから代りーに入ると教科書を  
 出して行かれた。これが終るともとの理一の教室にわづまきりつ  
 入る。その組の勧誘をやった。今年も連中の体の大きいには  
 驚く。十六番、十七番、十八番、十九番、二十番、二十一番、  
 二十二番、二十三番、二十四番、二十五番、二十六番、二十七番、  
 二十八番、二十九番、三十番、三十一番、三十二番、三十三番、  
 三十四番、三十五番、三十六番、三十七番、三十八番、三十九番、  
 四十番、四十一番、四十二番、四十三番、四十四番、四十五番、  
 四十六番、四十七番、四十八番、四十九番、五十番、五十一番、  
 五十二番、五十三番、五十四番、五十五番、五十六番、五十七番、  
 五十八番、五十九番、六十番、六十一番、六十二番、六十三番、  
 六十四番、六十五番、六十六番、六十七番、六十八番、六十九番、  
 七十番、七十一番、七十二番、七十三番、七十四番、七十五番、  
 七十六番、七十七番、七十八番、七十九番、八十番、八十一番、  
 八十二番、八十三番、八十四番、八十五番、八十六番、八十七番、  
 八十八番、八十九番、九十番、九十一番、九十二番、九十三番、  
 九十四番、九十五番、九十六番、九十七番、九十八番、九十九番、  
 百番、百一、百二、百三、百四、百五、百六、百七、百八、百九、  
 百十、百十一、百十二、百十三、百十四、百十五、百十六、百十七、  
 百十八、百十九、百二十、百二十一、百二十二、百二十三、百二十四、  
 百二十五、百二十六、百二十七、百二十八、百二十九、百三十、  
 百三十一、百三十二、百三十三、百三十四、百三十五、百三十六、  
 百三十七、百三十八、百三十九、百四十、百四十一、百四十二、  
 百四十三、百四十四、百四十五、百四十六、百四十七、百四十八、  
 百四十九、百五十、百五十一、百五十二、百五十三、百五十四、  
 百五十五、百五十六、百五十七、百五十八、百五十九、百六十、  
 百六十一、百六十二、百六十三、百六十四、百六十五、百六十六、  
 百六十七、百六十八、百六十九、百七十、百七十一、百七十二、  
 百七十三、百七十四、百七十五、百七十六、百七十七、百七十八、  
 百七十九、百八十、百八十一、百八十二、百八十三、百八十四、  
 百八十五、百八十六、百八十七、百八十八、百八十九、百九十、  
 百九十一、百九十二、百九十三、百九十四、百九十五、百九十六、  
 百九十七、百九十八、百九十九、百。

昭和2(1927)年4月21日の日記





## 五・妻久子の昇天 昭和十年(一九三五年)満二十五歳

六月十七日(月)

見舞客多し

六月十八日(火)

山田、鈴木両先生徹夜してついでにもらう。

夜十時ころ別れの辞を残し一時冷たくなる。十二時復活。

六月十九日(水)

正視するに耐えない苦しみの日。しかし頭脳は明朗。

六月二十日(木)

午前六時神に召さる。

会社の方々大勢のご援助により直ちに葬儀の準備。午後、諏訪台でやすむ。

通夜。父(\*馬場糸夫 取締役日立工場長) 十時半に来る。

六月二十一日(金)

早朝に移棺。近親と楽友二名とで小さな告別式。

夕方四時三十分より告別式。Mr. Hami 司会。本間先生、社長も来所。

六月二十二日 (土)

朝骨拾い。十一時より宅にて小式(B<sub>y</sub> 結城長老)

午後父母と奎太郎、池沢さん工場へ、久子の父母と今後の予算計画。

六月二十三日 (日)

朝父帰郷。十時奎太郎氏と淑子帰る。だんだん寂し。

## 六・第二次世界大戦の終戦の時 昭和二十年（一九四五年）

八月十三日（月）

朝から艦載機来襲。8時半頃本工場、特殊棟、事務所間に爆弾。可成りの被害あり。技術課も少々。空襲下に後片付け、疲れて帰る。

八月十四日（火）

千葉挺部隊に行かんとして汽車におくれ。午後被害対策並びに疎開方針につき8時半まで課長会議。一応の方針定めるも生気なし（女子寮にて）

八月十五日（水）

午前中空襲にて退避。正午 大詔直接御放送 戦争終結非常詔書 発表さる。皆涙して声なし力なし。八年余の戦争の幕としては甚だ情なき。早く帰る。

八月十六日（木）

**科学技術の進展に力をつくすべし。**

出勤 午後会議。午前で工員帰す。皆3時頃帰る。

信彦 夜帰る。興奮。一戦免れる様子也

八月十七日(金)

出勤して整理。8時より会議。明日より2日休みとす。暑くなつた。3時帰る。

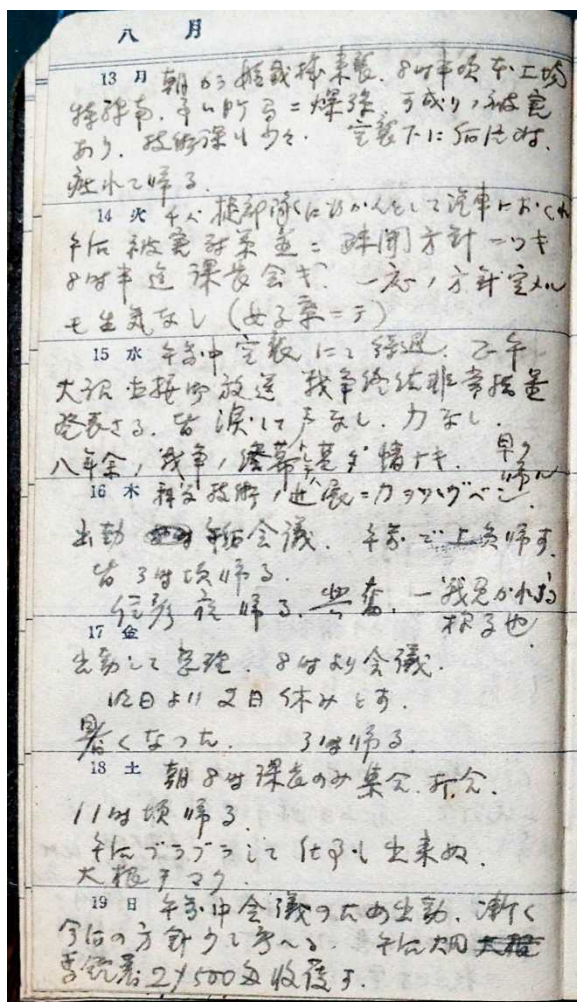
八月十八日(土)

朝8時課長のみ集会打合。11時帰る。午後ブラブラして仕事も出来ぬ。  
大根を抜く。

八月十九日(日)

午前中会議のため出勤。漸く今後の方針少し考える。  
午後畑 馬鈴薯 2/500 刈収穫す。

第5章 6. 第2次世界大戦終戦の時(1945年)



1945 (昭和 25) 年 8 月 13 日 ~ 9 日  
 の 日 記

## 七・妻 諫子の昇天 昭和二十一年（一九四六年）満三十六歳

十月十二日（土）

今まで明の鉛筆は毎晩削ってやっていた。いよいよ苦しくなったためにお父さんに頼むという。「明ちゃん、これからはお父さんにたのみなさい」と淋しく言いきかせた姿が哀れであった。

十月十三日（日）

諫子わるいので看護婦を山添看護婦会にたのむ。リングがほしいというので求める。一切れだけ食べた。

帰りを待っていた。

十二日まで克明に出納と主食の分量を記録した我慢強いのに驚いた。

諫子 起きるのが苦しく、このころより祖母に夜中助けてもらうこととす。祖母と気持ち通ぜず。

十月十四日（月）

小便が近く二十分間隔、ほとんど出ない。起きるのがつらい。食事は牛乳100g

程度でこまった。尿閉塞が恐い。

十月十五日(火)

カテーテリ入らぬ。腰痛をうったえる。なんともならぬか、残念なり。日立病院にたのむこととす。夜中を離さず。

十月十六日(水)

午前十時二十分諫子は淋しく急逝。東京日立病院で電話により聞く。手遅れか。なんとも口惜しく涙止まらず。通夜。

十月十七日(木)

工場の人々に全部世話たのむ。白石氏、委員長、教会植村牧師。

夕方 信彦と民子、萩元隼人氏来着。

十月十八日(金)

朝 仁科宗造さん、(バ) (\*馬場糸夫専務取締役)。

午後出棺、教会で告別式。

夕方火葬場へ。田口君。

夜 小餐。



## 八・妻よね子を迎えて 昭和二十六年(一九五一年)満四十一歳

三月二十九日(木)

夕方母(中野)と子供二人と静かな夕食中、よね子は和子ちゃんを連れて大きな荷物を持って帰ってきた。子供たちは急に賑やかに元気になった。当分6人家族である。宇都宮の方では色々と濡れ場があつたらしいが、とにかく昨日は話をきめてやって来た。

信州の父より来信があり、寛彦は27日埼玉の日本農学校へ向け出発した由。伊藤千春先生の学校なり。4〜500円の小遣いをやってくれという話。この位の面倒は見てもやれるだろう。

喉がいたむので今日から注射(抗ヒスタミン系)と飲み薬を大西さんにたのむ。武田さん内海さん(北海道に一週間行ってきた)と久しぶりに顔を合わせる。午後電球製品打ち合わせ会議。

三月三十日(金)

ようやく部長の顔がそろつたので9時から夜7時半まで会議の連続。懸案の雑

議題を片付けたが、かなり疲れた。

咳がいぜん止まらないのでムルチンの注射、今日もやる。タバコをやめればよいだろうが、やめないで直そうというのが無理だ。

家族が増したので、丸いチャブ台、子供たちの帽子やら大工道具やら色々と家財道具がガラクタと殖える。年と共に身の回りがゴタゴタしてくるものらしい。

## 九. 黒字に転換 昭和二十六年(一九五一年)

…事業は単に利益を得ることが目的ではない

一月一日(月) 元旦

PUBLIC SERVICE : 仕事に明け暮れする一年が漸く一応の STABILITY を得て過ぎ去ったこの新年に考えることは、この新しい年は PUBLIC SERVICE を目的として我々を進めなければならないということである。単に利潤を得ることが目的ではない。それは当然事業を行う者がとるべき手段である。しかし、その当然の手段たるべき利益が得られなかったので苦しかった。やつとその変則時様が過ぎ去ったので、これからが本当の仕事になる。

QUIET NEW YEAR : 大晦日に陽一來たり、明、裕によね子と5人で静かに正月を迎えた。今迄は昭和22年以来 本多、内藤、渡辺等の諸君とツモリつゝ除夜の鐘を聞くのが習わしであったが、今年は静かに年を越したい気持ちで、陽一と話しながら大晦日の夜を過ごした。陽一も昨年6月以来肺を病んで一時は手術でもする気持ちにまでなったが、岡寿郎先生の積極方針のお陰で9月から成蹊の高

校二年の課程を続け風邪などに時々いためられつつも、とにかくここまで来た。太つてはいないが顔色は悪くない。食欲も普通で元氣もよい。これでうまく進めば病気に打ち勝つことができるだろう。世情は騒がしいが、我々の生活も今年は好転するだろう。

〈啄木〉何となく今年はいいことがあるごとく 元日の空晴れて風なし

### 十二月三十一日(月)

今日から正月3日まで休日。

外との交渉はやめて屋内の整理、掃除、正月の準備などオヤジらしくバタバタ働く。これは一年に一度のことだ。朝のうちシメ縄飾りなど買ってくる。夕方からは子供相手に歌ったり騒いだり、のどかな大晦日。長くなるようにと例の如くソバをたべて、たべ納めとなる。

ラジオをきいて夜は静かに過ごす。明日からはまた酒に攻められるので、これはまことに苦痛である。静養して薬を用意して待機する。

昭和26年のうち365日欠かさず日記を書いたのは自分ながらよく続いたと

思う。メモ式の記録は今まで数年続けている。それでは面白くないので少々まとまったことを書き直したいと考えたのが一年前である。しかし単なる記録のみ多くて日記らしい日記にならなかった。来年から記録はできるだけシンプルにして、残すべきものは残したいと思う。

この一年、よね子は女房らしくなり、和子が一員となり、裕は寝水便が止まり、明はテニスの選手となって大人らしくなってきた。ただ陽一の入院が長期に亘るのが可哀そうだ。

小生、頭髮がメッキリ薄くなって前も後ろも淋しくなってきたのは、他人はどうでもいいらしいが自分では気になるものだ。

### 茂原の工場の10大事件

- |                     |     |
|---------------------|-----|
| 一. 小平相談役の逝去         | 十月  |
| 二. 黒字転換 二期連続        | 八月  |
| 三. 在庫量新記録(電球 190万個) | 十一月 |
| 四. 職制 三部確立          | 一月  |

## 第5章 9. 黒字に転換（1951年）

|    |             |     |
|----|-------------|-----|
| 五. | FL（蛍光灯）下請開始 | 四月  |
| 六. | 旧重役の追放解除    | 六月  |
| 七. | 電球 新鋭機設置    | 五月  |
| 八. | スト皆無        | 十二月 |
| 九. | 価格引上げ       | 四月  |
| 十. | 早野の道路舗装     | 三月  |

十.

米国 RCA 社との技術提携のため米国出張の記

…日本のエレクトロニクス技術を世界のレベルまで進歩させる

## 昭和 27(1952)年 6 月 10 日～10 月 16 日 RCA との技術提携のため渡米

*\*編集者注：この年の日記より抜粋した。6 月 10 日に渡米し 10 月 16 日に帰国した。米国滞在中の日記も每日一頁（B6 版横書き 19 行）びっしり記載されている。天気、起床・就寝時間、手紙の送受信記録、などあるが、日常的な記事や業務記録の大部分を省略した。*

### 昭和27年(1952年)1月10日(木)

武内さんから大森（本社）から電話あり、すぐに大森へ行く。

RCA との契約をどうするか、今日の業務運営会議（常務会）でやることにきまった。については **engineer** を派遣する。僕に行けときまったという。

武内さんとオデン屋 春日野で夕食。山王閣に行くと札幌営業所の井田所長に会う。また吞んで、武内さんは桑名へ。

### 2月8日(金)

午後 中研豊田副所長、浜田、吉田、只野の諸氏と工場の関係部課長集まって 27/上期の依頼研究題目のことを協議。大幅に増加した。

例の如く夕方工場の中で会食、一杯のんで 6 時半別れる。豊田さんは武内さん宅に泊まるというので一緒に入り込んで暫く話す。その間に武内さんはいい注意をしてくれた。僕は冷たい感じを皆に持たせる。温味がない。本当は人情があると思うが、



要するに人はそのようには感じない。これでは部下の人がついて来ない、ということ。

### 3 月 1 日(土)

RCA の契約、Technical Ad Agree.をすることに 2 月 26 日の役員会でできた由、連絡があった。これで Sign すれば契約はいよいよ出来ることとなる。

夕方 5 時半、馬場のお祖父様（馬場糸夫）が来着。4 畳半で武内さんと三人で夕食。いい機嫌で話は 11 時まで。**最も大事な話は：社長や工場長は子使である。その気持ちでなければ小平さんの真似はできぬ。しかし出来る人はいないであろうと。**

### 4 月 28 日(月)

本社常盤橋で支度金¥99,000 円仮受する。

帰途車中で考える。**日本の通信工業、特に Electronics は世界の level まで進歩させなければならぬ。日本の中でそれを最もやり易いのは日立だろう。その日立の中でこの仕事に専念するのは自分自身であろう。この目的に自分の全生涯をさし向けよう。**

### 6 月 9 日(月)

10 時 町保へ、工場長室でしばらく話す。11 時 56 分茂原発、井筒さんに同行たのむ。20 人ほどの人に見送られる。見送りは大げさで好まぬが、好意は謝すべきだ。

常盤橋へ 2 時、人事、庶務の辺りを歩き回る。

小石川に井筒さんと二人で 6 時前着。入浴、夕食、あんまする。おそく後藤恒夫さん来り、3 時半まで話す。

### 6 月 10 日(火)

小石川を 9 時に出る。常盤橋で高尾さんから、日立 Electron Tube の進み方を見てくるようご注意あり。11 時大森へ。西さんほかに挨拶。商品部一同と工場の部長、工場長と昼食。通信機部田口部長、戸塚の中岡部長ら約 30 名の見送り。14 時 10 分 PAA 機で羽田を出発 高橋忠夫君と二人。

乗客 70 人で満員。やがて満月の海上になる。白雲点々と月明の下にあり夢のようだ。時計は 3 時間進んで、12 時 45 分 Wake 着 13 時 50 分 Honolulu 着

午後 6 時 Honolulu 発 PAA in Pacific で 10 日を 2 度くりかえす。

### 6 月 11 日(水)

7 時 SFO 着 13 時 40 分 SFO 発 22 時 15 分 Chicago 着  
(SFO から Net 6 時間 35 分) 24 時 Chicago 発

### 6 月 12 日(木)

午前 3 時 New York 着 Commodore Hotel

午後、Mr. Nettel (Hitachi Prod. Corp.) のところに挨拶だけ

### 6 月 13 日(金)

11 時半 RCA の office Rockfeller Centre の License Depart に行く。

Mr. Straus (51 歳) は丁寧話してくれ、来週は Harrison へ行くことにする。

Commodore Hotel は印象悪く、Empire Hotel に変える。

### 6 月 18 日(水)

RCA 行きを止めて Hotel の引越し。East Orange へ、Tax で約 50 分かかった。

「大陸」という店 (Empire の前) で Type Writer 一台を買う。



購入したタイプライター  
左側は写真撮影時に置いたパソコンのマウス

### 6 月 19 日(木)

1st day RCA Study

Mr. Simokat が Standardizing Section へ案内してくれた。膨大な Standard 集を見て驚く。

**6 月 20 日(金)**

検査のことを調べる。Quality Testing つまり抜取りで特性を検査するところ。Mr. Nagel というさっぱりした老人がよく教えてくれた。

**6 月 28 日(土)休日**

午前 Report to Japan

午後 Circle Line の船で Manhattan Isl.廻り。

**6 月 29 日(日)休日**

Hotel で一日報告書かきと勉強

昭和 27(1952)年 7 月

**7月1日(火)**

Production & Material Control の仕事を調べる。

課長、係長ほか 3 人について、聞いて歩いた。ちょっと面白いので各種の表や印刷物を集め、夜は一気に 10 枚余りの報告書をまとめた。IBM を使っている。はじめて見たが相当なものだ。生産、材料、賃金、原価と各方面に利用している。30 坪くらいの部屋に各種 20 台くらい並んでいる。IBM から賃借りしているところは我国と同じやり方だ。

**7月4日(金)休日(Independence Day)**

昨日英国人の Mr. Davis が独立祭の日はどうっかり外には出られ

ない、撃たれてしまうと冗談をいった。そのためでもないが、われわれも終日 Hotel の外には出なかった。

### 7月5日(土)休日

内外の武田氏、渡辺氏、千波氏、加藤氏、車の持ち主の新井氏と Country Club N.J.(River Vale)に行きゴルフ。森、池が多く lost ball 4 ヶ、これはまれなことだ。Score は 51、56、55。

### 7月6日(日)休日

昨夜馬場さんより来信あり。健康、特に早起きと小食のことが書いてあった。両方とも守れない。今晚から早く寝て、早く起きるようにしようと高橋君と話した。

明日の準備、今後の Program 作成などに時間がかかって、12 時すぎになってしまった。終日 Hotel、これで米国から見た日本は判らない。

### 7月 10 日(木)

Mr. Simokat に案内してもらって、Jersey City の Warehouse Co.という大きな建物（約 2 百万 m<sup>2</sup>）を見に行く。

### 7月 12 日(土)休日

Last Day in East Orange

馬場さんから早起き、小食、水を飲め、と教えられたが、早起きだけはどうも苦手なり。アメリカ人は、一般に夜更かしだ。

地下鉄は終夜運転、商店でも Drug などでは朝までやるのがある。しかし Harrison 工場のように 7 時から始めるところもあるから、やはり早起き人の方が多いのであろう。

### 7月16日(水)

相変わらず 95° F。

一晩中汗が流れて安眠できず。フワリと沈むベッドくらい暑いものはない。日本式センベイトンがなつかしい。

Harrison 工場は 2 時半で早仕舞。

### 7月18日(金)

本日で RCA の仕事おしまい。

午前 Mr. Simokat の部屋の残務整理。午前 Mr. Bradley に部品、材料の見積をもらって 3 時過ぎに帰る。

### 7月19日(土)休日

朝 Report など書きまとめる。

12 時ホテルを出る。Public Service の Bus Terminal がホテルのすぐ前にあるので都合がよい。#118 の Express により 35 セントで New York に 30 分で行かれる。手紙（大部の報告）、資料、包装見本、書物（自宅あて）を発送する。

Rockefeller Plaza あたりを散歩して帰る。

### 7 月 20 日(日)休日

New York Times の部厚い日曜版 (250 頁以上) をひろってよむ。Truman の Midyear Economic Report to Congress の概要記事を面白く見た。アメリカは軍需インフレで今後も繁栄をつづける腹らしい。2 : 50 発バスで N.Y.へ。Sub にのりかえて Brooklyn の Yankee Stadium に行く。なるほど大きいものだ。Yankees と Chicago との試合。試合は双方慎重にマジメにやっている。Chicago が危うく 5 : 4 で勝った。Error を一つも見ることができなかった。

### 7 月 24 日(木)

Bell Telephone Lab. Murray Hill へ行く。まことに至れりつくせりの研究所。100 万坪位の芝生の中にきれいな建物(2 万坪はあろう)がある。これだけ金をつかって (年に 8 千万ドル) 7,200 人の人をかけて、引き合うものだろうか。

### 8 月 10 日(日)

朝から PM 1 時まで高橋君と大馬力で Rep.整理。資料も含めて約 40 頁できた。2 時にようやく朝昼合併食をして、高橋君は Newark に帰った。別れ別れになったのはこれが始めてである。

### 8 月 14 日(木)

Lancaster を去る日。

Philadelphia へ、Hotel Benn Franklin に泊まる。

### 8 月 15 日(金)

Hotel B. Franklin より Cab で Delaware River の High Way を渡って RCA Camden に行く。1930 年に Victor と RCA が一緒になり、その前からあった工場だから可なり古い感じ。高いのは 10 階、普通 5 ないし 6 階、General office ありきれいな陳列場、Theater の小さいのがある。Apparatus 関係の技術本部のようなものである。Commercial Equip.の工場と Metal Fabrication の工場とを見た。Mr. Sutherland が、午前 10 時半から午後 5 時まで丁寧に案内をし、話し相手になってくれた。日立マーク入りの Slide Ruler を差し上げた。

30th Street Station で夕食をとり、7:00 発、8:21 Newark 着、Military Park で高橋君と一緒にになる。

### 8 月 17 日(日)

いい天気だから 9 時半頃（早起きなり）ベッドを出て、高橋君と二人で Penn Station より Point Pleasant、そこから Bus で細長い島の上を Sea Side まで行った。ほとんど全ての人は Car で行くから Train は空いている。この間すべて別荘風の家が続いている。Car は充ち充ちている。1 時間ほど裸で日光に当たり、Photo をとって、また Bus、Train で Newark へ帰着。日光を得たが少々くたびれた。往復とも Train の中は Air Condition してありウトウト。



### 8 月 23 日(土)

快晴一点の雲もない。Cincinnati Zoo に行ってみる。

### 8 月 24 日(日)

快晴のまことに気持ちのよい日だ。日曜だから一切酒がない dry Sunday だ。

### 8 月 25 日(月)

9:10 (EST) Union Station から Chicago 行きの列車にのり、  
10:40 (CST) Indianapolis 着。

Cab で Warren Hotel へ。人口 50 万の都市である。

すぐ RCA の工場長 Mr. Ritter に電話して、秘書と話し PM1 時に行く約束をする。Mr. Ritter 不在のため、QC Section の長 Mr. Hoagland に半日 mT 管、GT 管の工場を案内してもらう。

### 8 月 26 日(火)

工場長の Mr. Ritter に会って、日立の説明をする。精力的な 40 歳位の人。昼食に部長全部、課長、担当 engineer を加え、9 人で会食をしてくれた。こんなことは始めてだ。朝渡した

“Hitachi Product” が効いたらしい。Locomotive も作っているという大抵の人は目を丸くする。よほど日本の真空管工場は馬鹿にされているらしい。

### 8月 27 日(水)

午前 m 管の工場を見に行く。Dr. Schmideck (Chief Engineer) が案内してくれた。7 カ国語を話すという。

午後 Mr. Hear と Mr. Robert、G Stevens に Record 工場と Home Instrument 工場 (TV、Rec.) とを 5 時までかかって案内してもらった。Record は日本ビクターを 3 から 5 倍にした Scale。検査法も Press も同様に幼稚な感じがした。

TV set 工場は始めてのためか、驚くべきものだった。7000 坪ぐらいある。Chasis 組立 conveyer は 12 本あり。Signal wave を出す Booth には立派な set あり、832A を使っている。

12channel 位、これだけでも大へんなものだ。

### 8 月 29 日(金)

Marion の人は皆親切だ。最も気持ちよい工場だった。

Mr. Dickinson 以下各課長 8 人で会食ご馳走になった。日立は GE のような会社だ。GE が RCA で姉妹会社になったようなものだ。と冗談ながら皆で話していた。

### 8 月 30 日(土)

組合の都合で、Marion は 9/2 も休みで 4 日間休みになる。

12:05 Marion 発。一日に 2 回しか列車がない。3:40 Chicago Union Station 着。

Hilton Hotel に泊まる。3000 室あり大きい。

### 8 月 31 日(日)

Gray Line Bus の Sight seeing をやる。Chicago はここ 100 年位で発展した町だから古い見物先はない。工業が主体であり従って商業が盛んな city である。従って遊覧バスはサッパリ面白くない。

### 9 月 1 日(月)

今日は Labor day で休日である。朝から雨降りで、2 時半まで Hotel の部屋で Report を書く。3 時に check out して、バスで Lincoln Park へ、6 時 Randolph St. まで引き返して Chicago Theatre という Movie とジャズ音楽をきく。Chicago はどうも深みを感じない町だ。10 時ホテルで又おそい夕食。深夜 12:15 Union Station にて高橋君と Double Bed Room に収まり東へ向かう。

### 9 月 8 日(月)

11 時 15 分 Newark 発の Express で Princeton Lab. RCA に行く。Princeton Junction でおりると、RCA の車が迎えに来ていた。12 時 Lab.着。Dr. Wolf (Research Depart の長) に会う。300acre の敷地の半分は森と川で残 150acre は flat lawn なり。その中に三階の建物がある。地下一階あり、Bell Lab.よりは小さいが、設備はよく行き届いた。きれいな Lab.である。600 人いるという。Transistor を丁寧に説明してもらった。

5:45 PRR にのって帰る。6 時半 Newark 着。

### 9 月 13 日(土)

休日、終日 Report 書き。大いにはかどる。時々 Phonograph で楽しみ、お茶ものみ、せめてもの慰めとする。

### 9 月 14 日(日)

Hudson River Day Line の Hamilton 号で、Hudson 上り Lecture Tour を試みる。Bear Mountain からバスで Storm King Road なる崖道を通り West Point の U.S.Mil. Academy の Chapel へ。一望の後、バスで Hyde Park の故 Roosevelt の邸へ行く。大変な人出だ。よくこれだけ死んだばかりの大統領の邸見物に来るものと思った。

### 9 月 15 日(月)

New York と Washington D.C.とよく歩いた。

2 時 RCA Building へ。Sales Depart の Miss Sterett に TV set(17T202) 1 台\$216.95 を注文。

4:30 Penn Station 発、Washington D.C.に 8:55 着。Hotel Statler へ。Air conditioned のきれいな部屋。但し古い。

### 9 月 17 日(水)

8 時半ホテルを出て、先ず Dep. Commerce で印刷物を受け取り、Cab で sight seeing。10 時ワシントンを列車で Union

Station 発。12 時 12 分 Philadelphia に着く。

病院大会や自動車大会で、どのホテルも満員。ようやく駅のオバサンに Rittenhouse Hotel を世話してもらう。

2 時半発 Gray Line の sight seeing。

### 9 月 18 日(木)

8 時半に出ようとしたら Storm が来た。土砂降りで出られぬ。Cab をたのんだが人にとられてしまって動けぬ。Trolley Car で 30th St. Station へ。Sub にのって Camden RCA へ。Subの方が Taxi より早い。Mr. Sutheland に会ってゆっくり色々話しをする。20 年前の建物だが Camden の中では最後の建物の由。この頃から工場は平屋にすることが流行したそう。建築費が第一の理由。運搬にもよい。4 時に辞去。6 時 21 分 Newark。

### 9 月 19 日(金)

時々雨の降る涼しい日だ。しかし高橋君と二人で Parts Mfg Factory と Miniature Tube Fac.とを最後の一回りというわけで歩いたために、工場内の熱気には汗だらけになった。これがハリソンの工場を見る最終日になるであろう。電話で雑件を片付け、Nettel 氏と来週の予定を打ち合わせる。

大陸に 10/16 東京着の飛行機 Reservation を申込む。

### 9 月 23 日(火)

朝食後 DeVega に行って、私用 TV Receiver を物色。721TS

(\$72.45) に決める。ところが送るのに 100 ドル以上かかるらしい。大倉（と変わった、もとの内外）の武田さんに電話したら、何とかしてやるとのこと。DeVega に Packing をたのむ。色々手間取って、11 時 40 分 Military Park Hotel を check out。DeVega で重い Carton を積み込んで、Sky-way、Holland Tunnel、大倉へ行き、持込みまた骨を折る。Cab の driver に Highway を教えながら 63ST Broadway の Hotel Empire に着いたのが 1 時過ぎ。12 ドル払う。RCA ビル Mr. Straus を訪ね、5 時にホテルにもどる。5 時半に高橋君来て、Radio City に行く。

### 10 月 3 日(金)

New York 最後の日。

RCA との sign は午後 3 時半から、RCA ビルで行う。

### 10 月 10 日(金)

4 日に N.Y. を出発以来、休みなく動いている。4 日の前から原口さん松野さんが見えて自分の自由にならなかった。その疲れが重なって、食欲なく、眠く、元気なし。Yosemite Sight Seeing

### 10 月 13 日(月)

San Francisco-Honolulu by PAN AM Moana Hotel 泊

### 10 月 14 日(火)

午後 11 時リムジンで Air Port へ

それまで Gray Line のバスで Sight seeing、ホテルで休む。

### 10 月 15 日(水)

0:35 PAA 四発機で離陸、No.4 Engine 故障、見ると#4 のプロペラは止まっている。遂に引返すことになった。1:38 再び Honolulu 着陸。4 時まで待たされ、4:40 離陸。

Date Line を通過したので、すぐ 16 日に変わった。

11:25 Wake 島に着く、12:40 再び take off

### 10 月 16 日(木)

5:20 羽田着。機を出ると多くの人が手を振っている。荷物の検査、税関、ドルのとりかえなど約 1 時間、多くの人を待たせてすまぬ。武内さんは眼をうるませて手を握ってくれた。

小石川別館で、村上、武内、田口、伊藤、久保、武井、土山、内藤とよね子と 10 人で夕食。11 時まで歓談。

### 10 月 17 日(金)

昨晚は武内、内藤、よね子と 4 人で小石川に泊まった。

武内さんと東京駅へ、第二丸ビルはほぼ完成、11 月 18 日完成式の由、20 日頃本社は移る。10 時、大森へ。西副社長に挨拶、丁度集まった事業部長の人々にも簡単に挨拶と報告 20 分。昼食後、管球部、村上部長など武内さんと二人で訪問。輸出部に

も行く。3 時大森を出て電車で信濃町へ。慶応病院の南 3 階 382 号の陽一のところへ。ラジオのこと花火のことなど 8 時まで話す。思ったより元気である。小石川泊まり。

### 10 月 18 日(土)

30 人会 (バ) (\*馬場糸夫重役) 謝恩会。日立関係で学位を得た人が集まる。ほとんど (バ) の指導によって学位を得た人である。昼食後お先に失礼、3 時半茂原に帰着。駅の Platform には部課長一同、社宅の奥さん 4、5 人の出迎えあり、恐縮したが嬉しかった。

新聞記者一人 (朝日) 来てテレビの話しをする。

### 10 月 19 日(日)

帰って見ると家は小さい。中はきれいではない。しかし畳の上で寝そべって暮らすと全く落ち着いた気分になる。やはり祖国の生活は身にぴったりしている。帰って一安心という気持ちである。

### 10 月 20 日(月)~22 日(水)

よね子と二人で、勝浦 勝栄館でゆっくり骨休めと共に報告をまとめ、会計整理をする。

### 10 月 23 日(木)

本社の要務会 (社長、副社長、坂口、秋田、馬場各重役、中村



重役)で約 30 分報告を行い、今後のこと(軍用無線機の件、RCA 出張者の件)をたのむ。

武内さんも午後見えて、人事課で RCA へのお出張者(橋本一二君)の伺を書く。旅費、金額のこと一気に計算する。

### 10 月 27 日(月)

本社との生産会議。五月の会議以来初めての出席であるが、送信管の受注発送は約 2 倍になった。受信管は 5 割り増しで 6、7 万個になった。RCA がきいたのと、本店販売組織が変わったのがきいている。全国生産も前の 120 万から 180 万に増しているから一般的傾向ともいえる。久しぶりに販売の上の色々な話を聞いたが、東芝の攻勢は相当はげしくなったらしい。

### 10 月 31 日(金)

町保で RCA 計画五年の大方針を論議する。大略は五年後に、CRT 10K (70M¥)、PT (30M¥)、RT 300K 個 (45M¥) その他、計 150M¥ということ。早野に総合工場を作ること。機械設備を完備することなど。この計画は急いでやる必要がある。



## 十一・次男 明の自死 昭和三十三年（一九五八年）

… 今後は社会に貢献するために働く…

十二月三日（水）

終日 家の中に引きこもる。あまり考えてばかりいると心の苦しみのために頭が変になりそう。明日から少しずつ外出してみようと思う。ただし自分の性格では冷静さを失う心配はまずあるまい。それが一方では欠点であると明が教えてくれたようなものだ。神を信じ、美を愛した心を受け継いで、これから誤りの少ない人生を終わりたい。

こんな考えを折り込みながら飯田、時又、南向に手紙を書き、善勝寺に戒名を頼む。思うようにペンが進まず。午後いっぱいかかる。やはりノーマルでないようだ。

大谷、山崎、内田、松本市長、林課長その他数名の来訪あり。

高橋、内堀君来たり香典や支出の整理その他をしてくれる。

子供らは今日から登校。

## 十二月四日(木)

疲れが出てからだがダルくなってきた。朝はゆっくり起きて夕方に寝入りする。帰宅後はじめて外出する。考え込んでもいけないので藻原寺戸川住職に話を聴くためである。昼前約30分間、今までの明の心の中を自分の判った範囲で申し述べ、信仰なきためにこのようになったことを懺悔の気持ちで話す。戸川師は済んだことにコダワラヌこと。仏壇を設けて形の上から入って明の供養をすること、明は病気だったのだから特に考えすぎぬことなど、話してくださった。

青空の強い陽の下、約40分散歩してRC(\*ロータリークラブ)の例会に出席して昨日弔問をうけた礼を申し述べる。

体育館の縄張りを見たりして、よく歩いた。

チロが3日ばかり食べぬ。篠崎犬医に来てもらうと気管支炎と心臓稗状虫とい、マイシンを注射・投薬してくれた。よく眠っている。

## 十二月五日(金)

昨日外を歩いてやや恢復。戸川師のすゝめにより9時過ぎに工場に出る。だん

だんと元気が出て仕事することが大へん効果あり。家の中にこもっていても明が生き返るわけでもない。やはり元気を取り戻して仕事に精を出し、**世の人々、特に若い青少年に何事かサービスをする精神に徹すること**が明の霊を弔うことになるだろう。このことは武井さんが夕方持参してくれた大阪の早川社長の厚意に対する礼状にも書いた。

午前は工場の外回りを歩き、午後は新營建家のことで皆と話し合う。日建設計と特殊管工場の計画を打合せ。浅沼組の中島氏と発送工場の見積結果につき話する。

夜7時より藻原寺戸川大僧正の来宅を賜り、初七日法事。暫く心の持ち方、心を柔らかくすること、法文のことなど話を聴く。

## 十二・茂原から戸塚へ転勤 昭和三十四年(一九五九年)四十九歳

二月二十日(金)

8時に茂原工場2300名余りが門内の広場に集まり新旧工場長の挨拶をする。折からの雨もあがつて温かい気温である。15年余りの工場に別れるのは些か感慨深いものがあつたが、それでも元氣よく「今後、世界の一流になるために襟度を持ち技術革新に努力されたし」と頼む。

後藤さんと二人で9時出発上京する。

本社で12時から開発会議。Ceramic Tubeの話。戸塚の列車 Automatic Stopのことなど。途中、堀切慶治氏が訪ねて、中研を紹介しろといってきた。

4時半に本社を出て、ひとり5時半に戸塚に着く。三上君出迎え、工場に着き滝田、藤江の諸君に会う。

鎌倉 香月園に6時半、馬場さん村川さん等と夕食。和泉式部の話など出て楽しい。早く別室に引籠る。

二月二十一日(土)

6時半に起きて昨夜から支度の朝食。香月園7時20分出て車で8時近く工場へ。細雨の中、中央池のまわりで2000人の戸塚工場全員に滝田君と二人で挨拶。「有形無形の財産を大切に育てよう」と話す。続いて部課長、両工場集まって再び挨拶。これで横浜工場と戸塚工場が分離した。

雨中、大田君、石井主任の案内で福利施設を見て歩く。昼食は部長会食。

馬場さんは落穂第2回。橋本専務が見え渡辺技師長が電々技師長次長だった木下氏を案内。戸塚工場技師長として新任。

香梅寮で身支度して出かける。その前に友田君から経理、予算の概況を聞く。車で箱根へ、1時間半で底倉温泉つたや旅館、湯が快し。「ひさご会」春季懇親会。40人余りで歓談。

## 十三・コンピュータ部をつくる 昭和三十四年(一九五九年)四十九歳

八月三十一日(金)

会社の職制人事が今日から変わった。戸塚工場でも高田昇平氏が来てコンピュータ部を作り、岩間君が副部長になる。久米君は生技にかわり平岩、小倉、野上君が新課長となる。

部課長会議を10〜13時開き、一同挨拶。随分賑やかになった。それで仕事が多くゆけば申し分ないのだが。

横浜工場には疊君が総務副部長として来たり。滝田さんとやってきた。人の出入りで終日ざわめいた。

今日の常務会で来期新営計画の目鼻がついた。約10億に近い計画である。早速その構想を練り、関係の連中を呼ぶ。

夕方、電子工場で全員に挨拶。

珍しく6時に帰宅。



## 八月二十二日(土)

朝から新営計画の進行を相談する。有線の方は特にいそぐので伺書を早く出したい。建築の方も早くしたいので月曜日に日建設計を呼ぶことにする。

山下英男先生が見えて Paris の Data Processing の International Conference のお話あり。日本の技術が世界的に認められたことを聴き意を強くした。

12時40分先生と岩間君とで箱根仙石に行く。流石に涼しい。夕方までのワンラウンドして富士屋ホテルで夕食。7時40分に出て、藤沢で先生と別れ、10時近く帰宅。

## 十四・コンピュータ工場の構想 昭和三十六年(一九六一年)五十一歳

二月二十二日(木)

Top Management Seminar bei Prof.Dr.Mellesavich

二日間続けて Lecture を神妙にきくのは珍しいことだ。しかもドイツ語だから通訳の話の間はゆっくり休める。それでも二日目夕方になると言葉も少し思い出した。パーティーのときには Ich have eine Frage と買収会社の取得資本は 50% 以上がよいか否かといったら、やはり Leadership をとることが最重要だから 51% にしろといった。

8 時、工場にちよつと立ち寄り 826 の電車に乗る。田口さんと一緒に東京駅まで 5 分歩いて商工会議所へ。

この Prof. は理屈が多すぎる。何故必要かということが長くて、どうすればよいかは短くなってしまう。やはりドイツ人である。それでも初めてだから Grundlage が少し判った。Systematisch に考えることができそうだ。役にたった。

三月二十四日(金)

ゆつくり八時半に出かける。外歩きが数日続いたので工場に座っているのは久しぶりであり、それだけに来客者が多い。

本社 収支予算常務会の議事録をみて激しい空気が伝わってくる。

KECや昭電にたくさんの方卒を採用した話をきく。今後の運営は多難であると思う。大いに引締めを当分の Polick にしたい。

昼食後、組合との生産審議会あり。最初の挨拶をする。特に昭電労組のことを頼む。

夕方上倉田敷地の工場計画を立てる。15億円／月のコンピュータ工場の構想である。

3カ月振りに小唄のけいこに出る。「せかれ」その他4曲を憶える。小林、中野、木村君と4人なり。滝田、山田君もあとで来て10時頃まで大いに飲む。

## 十五・制御用コンピュータ設計課を設立

昭和三十六年(一九六一年)五十一歳

七月七日(金)

ひどい蒸し暑い日であった。30℃を遥かに越えていたであろう。

8時過ぎ工場に出ると、九州、大阪その他各地から技術課長などがやってきている。今まで営業技術合同の連絡会議をやっていたが、今回から分離した。第一回の技術会である。9時半から始まり橋本常務も見えて終日お座りになった。田口さんは昨夜から左頸をひどく腫らして戸塚病院まで来たが、会議には出られずコンピュータと無線を6時半までかかってすませた。コンピュータのいい型が出来ぬという文句。無線は他社に遅れすぎているという意見など盛んであった。書類だけは高さ20cmくらいに上がり相当な充実をみせたが、話の内容はどうか。香梅寮で一同ビール、夕食。8時半帰宅。Projector 調べる。

## 七月八日(土)

朝から風はなく暑い。夜は寝冷えか、ここ数日、喉がいたく、痰が出る。鼻もおかしい。薬をのんで工場に出かける。

すぐ8時半車で上京。電車の方が早い、方々歩き回るので便利で涼しい車にする。10時過ぎ本社へ、大西さんの部屋で星合所長と無線の開発・研究を中研にお願いする件を正式に頼む。

大西さんにRCAその他出張のレポートを述べ、301をやること、職制改正のことなどたのむ。**制御用コンピュータについて大西さんは我が意を得た形。**

市ヶ谷で信彦と落ち合い赤坂見付の「こづえ」で昼食。

2時過ぎ松風の先生宅でいこ「移り香」の譜を書いてもらう。5時近く工場に帰り、机上整理、江守君と話す。7時近く帰宅。

## 十六・藍綬褒章を受章 昭和四十八年(一九七三年)六十四歳

### 四月十七日(火)

朝7時半まで目覚めたりウトウトしたり。8時朝食。

この日、国鉄はじめ交通スト。日立市もスト。終日動けないので大みかで過ごすことになった。日立研究所で57回発表会。この研究所は41年前に入社したところ。先輩の先生たちも見えて8時50分から小林所長の概況あと8件の発表。電力のコントロール、公害システムなど。昼食後、所感を述べる。積極的に難に向かうこと、地熱の開発などを話す。午後はねむたかった。

夕方一同乾杯して4時半に散会。

神原、只野と大みかクラブにもう一晚泊る。小林、高砂と夕食。8時半部屋に入って休養する。

### 四月十八日(水)

6時過ぎに起きる。201の広い部屋に2泊した。7時大みか駅へ。今日は時間通り列車は来た。車中でサンドイッチの朝食。上野駅は少々遅れ。喉はかなり

よくなった。

日立メデイコの甲本君の主催で医療システム懇談会、関係社長、所長など集まる。今後のシステム営業と開発について話し合う。

中村事業部長からコンピュータの話聞くなど。

2時半新丸ビルを出る。(営研)でMDC主任技師と4〜6時懇談。夕食を共にした後、電車で帰る。

四谷で小唄のけいこ久方ぶり。8〜10時若裕さんも来る。10時20分白金。

#### 四月十九日(木)

朝ひとり食事。簡単に済ませて8時20分白金を出る。新しいキーがドアについた。ダブルチェックになる。定例常務会で人事から決算で午前中かかる。近頃スビードがぶった。昼食後も新営など続いて3時半になっても終わらない。中座して日本ビルへ、事業部長・工場長会議、とりいそぎ報告と懇談。駒井さんに電々米沢総裁へ広告のお詫びに行ってもらった話をして社会的配慮を頼む。夕方理髪。6時過ぎパレスホテルでサッポロ門脇社長新任のパーティは日産関係、先輩・

友人多数、楽しく話して7時半白金。よね子来ている。服装の支度など。

#### 四月二十日(金)

7時前に起きて二人で支度。よね子は昨日出来上がった小豆色の紋付をつける。8時過ぎ白金から郵政省へ。黄、紫、藍綬褒章の24人に伝達式あり。前田憲一、阪本勇、宮憲一などの諸氏同席。10時半から帝国ホテルで数百人の方々参集して通信記念式典。久野郵政大臣による式。つづいてパーティ。先輩知己の方々多数に会う。陛下拝謁のため宮中参内。11名のバスで坂下門から参内、1時40分陛下のお言葉あり。写真のあと約一時間皇居内を歩く。賢所、吹上を回って坂下門から退出。3時半新丸ビル。よね子と写真。机を片付けて歌舞伎座へ。雲水記、佃夜嵐など。9時40分白金。一杯。



第 5 章 16. 藍綬褒章を受章(1973 年)



昭和 48(1973)年 4 月 20 日  
藍綬褒章を受章



## 十七・食道癌を発症して 昭和六十一年(一九八六年)満七十六歳

五月二十五日(日)

よね子と裕と3人で朝食。吹上宅もこれから一カ月ばかり別れて(\*東海大学の病院暮らしとなる。八尾の家の建築も目鼻がつくことだろう。裕はこれからのことをしばらく話して日立へ帰って行った。

昼はうどんを食べる。味がよい。身辺のこと片付けて机上の記帳などする。病院への荷物もほとんどない。「日交」の車でひとり出かける。東名道で吹上から病院まで50分、病室は休日閑散。静かにTVでスポーツ見たり、鮭の夕食は味気ない。

五月二十六日(月)

朝はこの3週間、同じように早く起きて新聞を求める。朝食後胸のレントゲン一枚だけ。手術は28日ときまり、今日からその準備が始まる。地下の床屋で散髪する。本『世界は音 ナーダ・ブラフマー』を読み終わり、メモ取りもすんだ。

智子が先ず来る。陽一、よね子、高山、十河夫妻と皆さん集まる。

幕内、杉原の両Dr.からよね子、陽一たちに詳しく説明あり。新食道は胸骨の上に出すという。いたしかたない。十河さんによると知巳さんはよくないらしい。こちら夕食で現食道使用は終わった。読みながら寝る。

### 五月二十七日(火)

腹の中を空っぽにして手術の準備をする日である。外は快晴で珍しく穏やかな日であるが、終日部屋の中にいる。ゴリテリー液なるものを500ml×6本計3ℓを朝から夕方まで飲む。下痢で一切を流し出し、最後は透明な液になる。その間に抗生物質をのんで大腸菌など一切なくすという。朝から静脈に針をさして点滴をする。スタンドを側において動きが不自由なり。午後、智子が来てくれる。色々と話して帰る。三富教授、幕内、杉原Dr.、麻酔の三浦先生それぞれ来室あり。

### 五月二十八日(水)

いつものように5時から覚めて、ラジオ、新聞を買ってくる。8時30分よね子、陽一、裕、和子そろろう。高山。移送ベッドでいよいよ手術室へ。9時30分入って、9時45分麻酔がかかったという。13時ころ家族は三富教授から食道切開品

の説明を受けた。手術終わりは 15 時か。15 時 50 分 I C U (Intensive Care Unit) に移る。ここまでは家族は付いていて I C U の中まで入った。

19 時、一時的に麻酔が解け、病院の人が声をかけたと云うが本人は定かに憶えていない。

コノあたりは 2 週間後になって書いている。

## 十八・癌の九回目の手術 平成六年（一九九四年）満八十四歳

五月十九日（木）

昨日到着した（入院先の東海大病院に）月曜日からの新聞を一通りめくって読む。手術は明日うけるが、あまりやることはない。整形外科のDr.宮坂は初めて。Dr.太田と共に見えて手術の範囲とあとをカバーする皮膚の線引きあり。麻酔はDr.滝口も今年一月の手術以来だ。

方々と電話で話をする。明日午後からしばらく話がなくなる。夕食は毎週木曜日の特別食で食堂から昨日注文を取りに来た。相撲は12日目でTVで見ても緊迫してきた。

五月二十日（金）

10時Dr.太田、腕に点滴入れる。飲食なし。11時智子が来た。夜になって裕、泰敬、和子も来たという。12時衣服を手術用にとりかえ、部屋を出たのは14時。14時45分手術開始。以下は智子と裕の記録あり。

かなり大手術で右耳下から鎖骨まで幅4〜5cm切除して、胸の筋肉をその分だ

けまわして埋める。胸の掘りあとには左大腿部の皮膚をはがしてカバーする。  
24時35分終了。9時間以上かかっている。24時55分病室に戻った。

### 五月二十一日(土)

泰敬、和子、裕、智子でDr.太田の説明を詳しく聞いた。朝まで残ったのは裕で、病室に付き添ってくれた。

こちらは5時まで夢をみて、色美しい別世界など妄想がつづいた。

7時ころ全身痛み。10時やや平常に戻ってきた。裕11時35分に帰った。

Dr.太田によって(手術のとき挿入した)食道、気管の棒やパイプがとれて、やつと声がでる。尿パイプも抜けた。痰が少しづつだが連続して出るのは苦しかった。深夜になってようやく収まった。栄養はすべて点滴。ベッドから出ることは許されない。

### 五月二十二日(日)

呼吸が収まってきたが、カスレ、ダミ声はよくならぬ。発熱37.4℃、血圧は190/160と高い。気分はよくない。Dr.高倉にホータイの巻き替えをしてもらう。たい

へん大量のホータイだ。Dr. 太田は夕方見えて 20 日の手術について詳しく説明あり。声が出ないのは重大で脳から心臓への神経が裸になっている。切れてはいないが回復は困難。血圧はいずれ下がるだろう。

2 時陽一と智子、3 時には泰敬と和子がきた。陽一は昨日フランスから帰った。相撲の千秋楽など見る。



十九・最晩年の年始に 平成七年（一九九五年）満八十五歳

一月一日（日）

病院の一室でひとり新年を迎える。

心安らかに、家の中、周囲の多くの人々に感謝している。形の上では不自由で、何もできない生活だが、それでも気楽に受け入れて過ごして行くように勤めている。

しかし字が下手になり、書くのも遅くなった。それでも新年を迎えるとは思っていないかった。

夕方、陽一の一家、裕一家、八尾二人が病室に来てくれた。

二月一日(水)

日記帳をさぼり始めてから三日たった。几帳面に考えることやめたのだから、何日たつてもよいのだが、何か理由か原因があるだろう。先ず体調がよくない、記憶が危ない、からだの痛みも増した、病気も進行している。何か天命のようなものも感ずる。

二月二日(木)

今日から病院で座椅子使う。背中の壁が90度近くの垂直に近く立てば、そこには重力が大きくかからないから楽に座ることが出来る。座椅子はそれを実際にみせるのが目的で作られたものである。正しい姿勢で座ることはいいことだから皆さんに薦めて座敷の中が起居整然となるのは結構なことだ。

交通事業の整然としていくこと、スポーツの振舞いが多くの人に美の行動を見せてくれるなどを含めてよいことだと思う。

二十・最期の日記 平成七年（一九九五年） 満八十五歳

二月五日（日）

日によつて重要な出来事をむかえ、また必ず記録に残る事柄も連日のように起こっている。毎日起こっている事柄は極めて限られたことである。頭の中で考えているのは何事も勝手であるが、実際の私の病室の中の生活ほど少ししかできないのは外に類例はないといつてよからう。思つてみることに、実際に行つていくことにこれだけ大きな違いある人はまずほかにないといつてよろしいだろう。

1月1日 日曜 甲午日 ●新月 年賀 晴 (3家族来てくれた)

病院の一室でレタリ新年を迎える。  
心算うがに、家の中、周囲の多くの人々に感謝  
している。形の上では不自由で、何もできない生活  
だが、それでれ気楽に受け入れて、過して行く  
ように努めている。

しかし字が下手になり、書くのも遅くなった。それでは  
新年を迎えるとは思っていなかった。

夕方 陽一一家、裕一一家、八尾2人が病室に  
来てくれた。

平成7年(1995年)1月1日の日記

最期の日記 二月二十日(月) 日立戸塚病院で久保 智子記

一昨日の晩は和子が泊まってくれた。昨晩は智子が泊まった。話かけてくれることはよくわかるから、イエス・ノーの意思表示はできる。アーアーと時々声を出す言葉にならない。口びるの渴きがひどくガーゼで濡らしてなんども水分を与えてもらう。昨日は日中よくねむれたので夜中は午前3時50分から5時20分よくねむった。5時40分首より出血あり看護婦にガーゼを替えてもらい、血圧計をつけた、98／62。止血剤を点滴してもらう。105／54、もうやめた。もういいと胸をかきむしろうとするが両手をおさえられる。点滴の管が外れる。智子は手をさすって落ち着かせてくれる。菊池先生が8時30分に来て、紙に書こうとすることができない。先生は動脈が破れて出血したと。自分の希望通り輸血はしないで自然にまかせる。加藤先生が9時20分ガーゼを替えてくれる。柴田院長、婦長さんも来てくれた。生へのこだわりはなく、すべて先生と看護婦のいうことに従った。紙と鉛筆を要求、「し」と書く。よね子、智子、和子がいる。しっかり手をにぎる。だんだん力が弱くなった。

午後1時56分永眠

## 六．橋本一二氏の弔辞

平成七年二月二十三日 護国寺の告別式で

私は昭和10年北大理学部物理学科を卒業したが、12年まで東大航空研究所にいて、そのうちに日立に誘われて本社に入った。ただちに専務であった高尾直三郎さんの部屋に呼ばれ、「私は日立をGEのような会社になりたい。つまり弱電にも手を出したいので、今回買収したシブヤレントゲン会社に出向してX線の仕事をしてくれ」と申しつかった。もつとも東大航空研究所にいたとき、X線による航空機用金属材料の研究をしていたので、白羽の矢が当たったのだろうと思う。

当時日立研究所（日立工場本館の裏側にあつた）にはすでに久保さんがおられ、時々シブヤレントゲンにも出張されたため、お知り合いになったのだった。その後シブヤレントゲンは、今の日立メデイコの前身となった。それからエレクトロニクスの仕事上、中央研究所、茂原工場、神奈川工場関係で、真空管関係、半導体、コンピュータ等で一生御指導を受けることになった。

神原豊三、只野文哉さんと共に、戦時中は当時の中研所長であった馬場さんに、茂原工場に行つて電波兵機用の真空管を一個でも増産するようにと言われ、長期出張を命ぜられたこともあった。元帥というニックネームをもらったのも、神原、只野両氏からだつた。戦争が終わり中研に戻つたが、25年頃久保さんが私の研究室に時々来られ、「橋本君、茂原工場に来てくれないか」と再三誘われたが、私はきつぱりと断つた。第一、日立の中では当時最もひどい工場であつたからだつた。断つても断つても、中研に出張されると久保さんはしつこく私の研究室を訪ねられ、茂原に来てくれと申されるのであつた。

そして何回目かに、

「橋本君、君は三顧の礼ということを知っているか」と申された。

「はい、私は知っています」と、申し上げると、

「何だ、知っているのか、知っているなら言ってみろ」とどやされ、

「はい、昔、蜀の天子となった劉備が、自分はこれから天下を治めるのであるが、仕事は一人でできるものではない。誰か良い部下がいなければならぬと思い、そこで田舎住まいをしていた立派な人物、諸葛孔明に目をつけ、何回も彼の所に行って、自分の部下になってくれと頼み、ついにこの人を手に入れた。この故事にちなみ、偉い目上の人が優れた人物を見出して、部下になって働いてくれと頼むことです」

と申し上げた。久保さんは、

「それだけ知っていて何だ。三顧の礼どころではない、僕はこれで五回目だ」

と怒ってしまった。所長からも、

「橋本君、もう行かなければまずいよ。それだけ言われるのはありがたいことではないか」

と言われ、研究をあきらめて工場に行く決心をしたのであった。

転勤になった昭和25年といえば、5000名以上の人員整理があり、40日以上もストライキがあり、まだまだ世間も工場も色々混乱のあった頃であるが、



「橋本君、今は世の中がこんな状況であるが、そのうちに各家庭に電話機やテレビがあるといった時代が来るような気がしてならない。トランジスターだってきつと大事業になるだろう。電算機も勉強しろ。すぐアメリカへ勉強に行け」

と、茂原工場とは一寸縁が薄い話を出され、私たちは、副工場長ともなるといい気なもんだ。テレビをはじめ、そんなことは考えられないと陰口を叩いたものだった。

しかし、今から考えてみると、コンピュータにしろ弱電の事業にしろ、その先見の明には、ただただ驚くばかりである。戸塚工場長時代を経て本社に行かれてから、この方面の事業のやり方を見ても、コンピュータを戸塚から分離して、当時のコンピュータ専用の神奈川工場を作るとか、トランジスターを使用する前は、コンピュータのメモリーはコアメモリーであったが、これを茂原に作らせたり、トランジスターまでも茂原でやり始めたこともあった。

再び繰り返すが、RCAとの技術提携をはじめとし、白黒、カラーのブラウン管、コアメモリーの成功によるHITAC-5020コンピュータの完成等すべてにつき、大河内記念賞、毎日新聞工業賞、科学技術庁長官賞を頂いたのも久保さんの指導

の賜である。学者としては、幾多の論文のほか著書も多く、色々の学会の理事長をはじめ、公職、団体等の役員を40以上もなされた。学者であり、事業家であり、広い交際家であり、長唄、小唄の達人であり、ゴルフをやれば30台40台でまわり、うまいばかりでなく、横浜カントリーでついにホールインワンを出された。世にも珍しい、このような方を失うことは、会社のみでなく日本の損失であると言わざるをえない。茂原工場時代、ある日、久保さんに呼ばれ、

「橋本君、このまま茂原で一生を終えるなんてつまらないと思わないか。俺は趣味として長唄、小唄をやろうと決心した」

と申され、

「それはいいですね」

と申し上げたら、

「ついては俺一人ではつまらない。君も一緒にやれ」

と言われ、私もついにこの会に入れられてしまったのだった。

久保さん、私の出した病氣見舞い状に対し、ご丁寧な御返事を9月6日に頂き、私の宝としてしまっております。今、幽明境を異にし、在りし日のあの温顔を想

い浮かべる以外になすすべもありませんが、あなたの御遺徳は永遠に受け継がれ、さらに精華を加え、発展されることでしよう。惜別の情絶ちがたきものありますが、あなたが社会に尽くされた業績はまことに偉大であり、衷心より敬意を捧げます。どうぞやすらかに眠り下さい。

【返仁会77号 1995年・春 「久保名誉会長を偲んで」より】

橋本一二氏の略歴

|           |               |
|-----------|---------------|
| 昭和十年三月    | 北海道大学理学部物理学科卒 |
| 昭和十年四月    | 東京大学航空研究所入社   |
| 昭和十二年四月   | (株)日立製作所入社    |
| 昭和二十四年八月  | 理学博士          |
| 昭和二十五年    | (株)日立製作茂原工場長  |
| 昭和三十九年    | (株)日立製作神奈川工場長 |
| 昭和四十一年    | (株)日立製作取締役    |
| 昭和五十九年    | (株)日立製作顧問     |
| 平成七年      | (株)日立製作名誉顧問   |
| 平成十四年八月一日 | 逝去(九〇歳)       |



七・  
久保俊彦著『随想折々』からの抜粋

## 序 文

二十数年の学習期のあと、私の社会生活の60年は一貫して日立製作所の中にありました。書き残し、発表したものの多くは社内向けでしたが、その間に社外の仕事も数だけはたくさんありましたので、外部に発表したものも可成りの数になりました。その中には今や読んでみる価値のないものが多いので、記念に残しておいてもよさそうなものを極く一部だけ取りまとめてみることにしました。お世話になった方々、親しくしていただいた知友の人々、家族、近親の人たちに差上げて、お礼のするしにしたいと思います。

「人間の頭脳と研究開発」の部類は私の仕事の関係から思い付くままに書いたものの一部であります。学問的でも、体系でもなくただの随筆です。

「企業文化」は5～6年前から広く使われるようになった言葉ですが、東洋ではずっと古くから言われてきた企業精神と相通じるものと思われまます。

「芸能」を構成するもののうちで「音楽」は最も主要な分野ですが、私共は小学校から西洋的音楽を教えられました。しかし学生時代の終り頃から日本の伝統音楽が奥深いもので、日本人に最も適した大切なものであることを知り、以来三味線音楽を趣味としております。

「その他」はいろいろのことに携わったうちで、こんなこともあったのか、という思い出のために、雑然と並べてみただけのものであります。

学会などに発表した技術論文は本書には入っておりません。格別の大発明や大発見をしていないので、歴史に残るような論文がないからであります。

小中学校の頃は青白いひ弱な少年で、中学担任の正木ひろし先生(後に弁護士になって八海事件など扱った)から、「君は20歳まで生きられないだろう」と言われたりしましたが、20歳を過ぎてからだんだん丈夫になり、軽い肋膜炎で2カ月ほど休んだりはしましたが、75歳までは病気らしい病気はありませんでした。両親が健康な遺伝子を与えてくれたお蔭と有難く思っております。

ところがこのところ数年、2～3カ月の入院を3回繰返しました。いずれも癌性腫瘍の除去、治療をして貰ったのですが、幸に早期発見されましたので、今のところ体調は快復しております。しかしこれから先、いつ何が起こるか判らない年令ですから、取り敢ず手許にある資料をまとめてみたという次第であります。

## 『随想折々』の目次

### I 人間の頭脳と研究開発

1. 研究開発と人間関係
2. 人類聴覚の危機
3. 競争と協調と調和
4. 情報の選別
5. 頭脳の縮退
6. 頭脳集約型産業

### II 企業文化

1. 企業文化による改革
2. 日立精神と企業文化
3. 捺印の法則
4. 世界に貢献する道
5. 博物館と企業活動
6. マイクロエレクトロニクス

レボリューションによる産業の将来

### III 芸能

1. 芸に遊ぶ
2. 教養としての日本の音楽



3. 邦楽の復活
4. 日米親善の小唄
5. 風神雷神と宗達
6. 芸文の伝統
7. 小唄の「こころ」
8. 小唄のリズム
9. 古典歌謡

#### IV その他

1. 遊びの役割
2. 私の修学旅行
3. 一隅を照らす
4. 珍友珍客
5. 医療福祉研 10 周年発足当時の回顧
6. 日本科学技術振興財団創立 30 周年にあたって
7. 宮城精吉さんを偲ぶ
8. エレクトロニクスの貿易問題  
特に半導体について

『随想折々』平成5年4月発行より

## 略 歴

| 年 代           | 略 歴                                                                                                             |
|---------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 明治 42 年(1909) | 12 月 8 日(水)午前 11 時 45 分鳥取県倉吉市西町で生れた。<br>父母、祖父母の家で、曾祖母も来ていた。<br>父と母が約 5 年間、私の日記を書き残した。父が 1/3、母が 2/3 くらいの割合で分担した。 |
| 大正 5 年(1916)  | 倉吉市成徳小学校に入学                                                                                                     |
| 大正 9 年(1920)  | 鳥取市郊外宇倍野村に転居                                                                                                    |
| 大正 11 年(1922) | 鳥取市鳥取中学（現在の鳥取西高）に入学                                                                                             |
| 大正 15 年(1926) | 長野県飯田中学（現在の飯田高校）より第一高等学校（現在の東京大学の一部）理科へ入学                                                                       |
| 昭和 7 年(1932)  | 東京帝国大学理学部物理学科卒業<br>日立製作所へ入社、日立工場研究係員<br>水銀整流器の研究に従事する。                                                          |
| 昭和 8 年(1933)  | 馬場久子と結婚、翌昭和 9 年長男陽一生れる。<br>その翌 10 年久子は肺結核で昇天した。                                                                 |
| 昭和 12 年(1937) | 萩元諫子と結婚、昭和 14 年二男明出生<br>昭和 16 年三男裕出生。                                                                           |
| 昭和 15 年(1940) | 日立研究所課長待遇                                                                                                       |
| 昭和 18 年(1943) | 茂原工場建設事務員兼務                                                                                                     |
| 昭和 20 年(1945) | 茂原工場技術課長                                                                                                        |
| 同年 11 月       | 工学博士の学位を東京大学より受ける。<br>論文題目<br>「水銀整流器の逆弧に関する研究」                                                                  |

## 第7章 久保俊彦著『随想折々』からの抜粋

| 年 代           | 略 歴                                     |
|---------------|-----------------------------------------|
| 昭和 21 年(1946) | 諫子は腎臓結核にて昇天した                           |
| 昭和 24 年(1949) | 茂原工場副工場長                                |
| 昭和 25 年(1950) | 芝野よねと結婚、翌 26 年和子を養女にする                  |
| 昭和 31 年(1956) | 茂原工場長                                   |
| 昭和 34 年(1956) | 戸塚工場長                                   |
| 昭和 36 年(1961) | 日立製作所取締役、通信機事業部長                        |
| 昭和 39 年(1964) | 常務取締役                                   |
| 昭和 43 年(1968) | 専務取締役                                   |
| 昭和 45 年(1970) | 取締役副社長                                  |
| 昭和 48 年(1973) | 藍綬褒章を授与される                              |
| 昭和 54 年(1979) | 日立製作所顧問に就任                              |
| 昭和 55 年(1980) | 勲三等旭日中綬章を授与される                          |
| 平成 元年(1989)   | 日立製作所特別顧問に就任                            |
| 平成 7 年(1995)  | 2 月 20 日 13 時 56 分日立製作所戸塚病院で永眠          |
| 平成 7 年(1995)  | 3 月 17 日閣議決定により「従四位」を授与<br>(申請元は電気通信協会) |

## 公職・団体経歴一覧表

平成5年3月現在

| 名 称                           | 役 職    | 就 任 期 間           |
|-------------------------------|--------|-------------------|
| 〈官庁〉                          |        |                   |
| 日本電信電話公社電気通信<br>技術委員会         | 臨時特別委員 | S39.6.10～54.6.31  |
| 日本電信電話公社クリーン<br>リサイクル委員会      | 特別委員   | S49.7.23～54.12.13 |
| 通産省電子工業審議会<br>電子計算機製作部会       | 専門委員   | S40.11.16～46.3.31 |
| 通産省機械工業審議会<br>通信機部会           | 専門委員   | S41.7.1～43.12.1   |
| 通産省工業技術院信頼性技術<br>開発企画委員会（休止中） | 委員     | S46.8.1～          |
| 通産省情報処理振興審議会                  | 委員     | S47.2.12～54.5.13  |
| 科学技術庁電子技術審議会                  | 委員     | S42.5.1～50.8.10   |
| 科学技術庁金属材料研究所                  | 運営委員   | S45.12.18～56.2.19 |
| 経済企画庁経済審議会                    | 臨時委員   | S44.6.26～58.10.11 |
| 新技術開発事業団開発審議会                 | 委員     | S51.5.26～59.6.30  |
| 新技術開発事業団井上春成賞<br>委員会          | 委員     | S51.4.27～H4.8.31  |
| 新技術開発事業団井上春成賞<br>委員会          | 名誉委員   | H4.9.1～現在         |
| 〈株式会社〉                        |        |                   |
| 東北金属(株)                       | 取締役    | S40.11.30～51.6.25 |
| (株)日本科学技術研修所                  | 取締役    | S44.5.24～H5.5.    |

第7章 久保俊彦著『随想折々』からの抜粋

| 名 称                       | 役 職  | 就 任 期 間            |
|---------------------------|------|--------------------|
| 〈法人〉                      |      |                    |
| (財)電波技術協会                 | 理事   | S37.3.27～40.1.29   |
| (社)建設電機技術協会               | 理事   | S42.12.14～48.5.23  |
| (社)建設電機技術協会               | 副会長  | S48.5.23～62.5.28   |
| (財)機械振興協会機械振興協会<br>賞審査委員会 | 委員   | S45.3.1～H2.2.28    |
| (社)日本機械工業連合会<br>産業技術委員会   | 委員長  | S45.11.20～49.12.4  |
| (社)照明学会                   | 会長   | S46. 5.14～48.5.18  |
| (法)超高性能コンピュータ<br>開発技術研究組合 | 理事長  | S48. 5. 23～49.5.30 |
| (社)日本電子工業振興協会<br>電子計算機部会  | 部会長  | S48. 7.1～54.3.31   |
| (社)日本産業用ロボット工業会           | 会長   | S49. 5. 22～51.5.26 |
| (法)超 LSI 技術研究組合           | 評議員  | S51.4. 1～54.6.27   |
| (法)技術研究組合医療福祉<br>機器研究所    | 理事長  | S51. 7.2 ～60.5.27  |
| (財)日本博物館協会                | 評議員  | S53. 6. 9～59.6.28  |
| (財)日本博物館協会                | 副会長  | S59.6.29～現在        |
| (財)日本科学技術振興財団             | 副会長  | S53.6.27～H3.6.19   |
| (財)日本科学技術振興財団<br>科学技術館    | 名誉会長 | H3.6.19～現在         |
| 科学技術館                     | 館長   | S53.6.27～H3.6.19   |
| 科学技術館                     | 名誉館長 | H3.6.19～現在         |

第7章 久保俊彦著『随想折々』からの抜粋

| 名 称                     | 役 職 | 就 任 期 間     |
|-------------------------|-----|-------------|
| (社)日本経営協会               | 理事  | S54.5.29～現在 |
| (財)電気通信協会               | 評議員 | S55.2.29～現在 |
| 制日本科学技術連盟石川賞<br>委員会     | 委員  | S58.5.1～現在  |
| (財)高エネルギー加速器科学<br>研究奨励会 | 理事  | S58.10.7～現在 |
| (財)日本工業倶楽部文芸委員会         | 委員  | S59.2.16～現在 |
| (財)倉田記念科学技術振興会          | 理事長 | S59.4.10～現在 |
| (財)日本特許情報機構             | 評議員 | S60.8.1～現在  |
| (財)ニューテクノロジー振興<br>財団    | 顧問  | S62.3.25～現在 |
| (学)科学技術学園               | 監事  | S63.5.31～現在 |

## 関連会社経歴一覧表

平成5年3月現在

| 名 称                  | 役 職                         | 就 任 期 間            |
|----------------------|-----------------------------|--------------------|
| 昭和電子(株)              | 取締役                         | S34.5.27－36.11.24  |
|                      | 代表取締役社長                     | S36.11.24－37.5.29  |
|                      | (S38.4. 日立電子(株)に社名変更)       |                    |
| (株)日本ビジネスコンサル<br>タント | 取締役                         | S35.5.28－43.11.28  |
|                      | (H1.10.1 (株)日立情報システムズに社名変更) |                    |
| 国際電気(株)              | 取締役                         | S37.5.28－54.6.29   |
| (株)中与通信機製作所          | 取締役                         | S37.8.21－39.5.24   |
|                      | (S49.5.2 (株)ナカヨ通信掛に社名変更)    |                    |
| 日立電子サービス(株)          | 代表取締役社長                     | S37.10.1－38.11.27  |
| 日立パーキンエルマー(株)        | 取締役                         | S40.6.30－42.6.30 頃 |
| 八木アンテナ(株)            | 取締役                         | S41.5.31－44.5.29   |
| 日立レントゲン(株)           | 取締役                         | S44.7.31－54.6.13   |
|                      | (S48.4.1 (株)日立メデイコに社名変更)    |                    |
| 日製産業(株)              | 取締役                         | S46.11.26－52.6.24  |
| ファコム・ハイタック(株)        | 取締役                         | S49.6.10－54.6.14   |
|                      | (H4.3.31 解散となる)             |                    |

## あとがき

先の世界大戦で敗戦し日本の国土は焦土と化し、（株）日立製作所をはじめ多くの企業の工場は壊滅的な打撃を受けた。父俊彦が亡くなったのは、この大戦後ちようど50年を経た年であった。今、日立製作所は世界的な電気機械システム分野の大企業として成長した。父の死去の前後には、高度成長した日本のバブル崩壊そして世界的にはリーマンショックといわれる金融危機にも見舞われたが、今日でも日立製作所はその規模を維持し発展し続けている。父の日記には、今日の日立を築いた多くの技術者や事業経営に携わった方々のこと、同業他社や日立を支えてくれた顧客のことも書かれている。

本書では父が成長した時期と、大戦前後の生きて行く苦しみを乗り越え、コンピュータなどの新事業を立ち上げていった時期の記録、そして晩年は病と闘いながら、おだやか死を迎えた日々の日記を抜き出してみた。「まえがき」と最後に引用した父の自著『随想折々』の序文にも書かれてあるとおり、社内外に発表した



論文・評論・随想など多数ある。そこには会社の事業に関する技術的な記事はもちろん、それ以外に広く文化的、社会的な分野での興味深いものが多い。

『随想折々』に掲載されている「芸に遊ぶ」は水戸市にある弘道館に保存されている裂公（水戸斉昭）の書の解説である。芸とは人間の精神と行動の基本である六芸をいい、礼（礼儀）、楽（音楽）、射（弓術）、御（馬術）、書（習字）、数（算術）の六つ、すなわち文武両道にはげみ、高度な人間形成のためにはこの六芸に遊ぶことが肝要と解説している。父の記録はそれを現代の社会で習い生きてきたようにみえる。一日一日を常に新しいものとしてすべてのものを受け入れていく生き方のようにもみえる。

護国寺での葬儀のときに故橋本一二氏から戴いた「弔辞」は、新事業の開拓に生涯ともに歩まれた厚情あふれる一文で、本書に掲載させていただいた。

本書の『久保俊彦の日記』図書目録の日記全76冊は、平成28年2月に日立製作所情報通信システム社戸塚事業所内にあった通信史料館に寄贈し保管していたことをお願いした。同戸塚工場の第17代目工場長の曾我政弘氏のご支援と、保管いただいた当時の同社情報通信事業部長新村篤氏、同社総務部の網村



東京丸の内センタービル日立社友クラブに  
所蔵されている『久保俊彦の日記』

郁緒氏に深く感謝を申し上げる。

現在は戸塚事業所が平成28年に閉鎖されたことにもない、『久保俊彦の日記』は、同年8月に東京駅前にある丸の内センタービル内の日立製作所 日立社友クラブに移管され保管された。同事務局長木場三郎氏と担当の川口道子さんに大変お世話になった。日立製作所の諸先輩の記録と共に保管されることを誇りに思い、

大変ありがたいと思う次第である。さらに多くの社友の皆さんにも目を止めていただければ望外の喜びである。

平成29年2月20日 父の命日に

久保 裕

# 私本・久保俊彦の日記

編集 久保 裕

茨城県日立市西成沢町二・十七・十三

電話 〇二九四・三七・一九二六

メールアドレス [kubo@mbh.nifty.com](mailto:kubo@mbh.nifty.com)

編集年月 平成二十九年二月

